

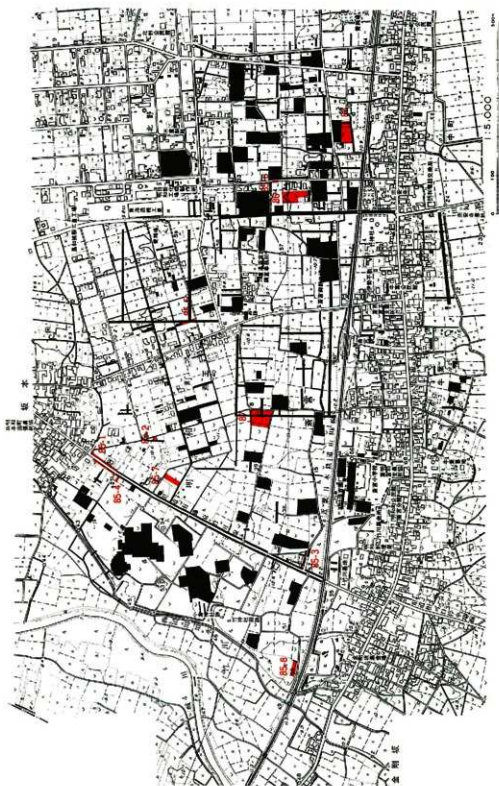
史跡齋宮跡

平成2年度発掘調査概報



1991

齋宮歴史博物館



第1図 平成2年度発掘調査地区

はじめに

昭和44年に始まった発掘調査は、今年で22年目を迎えましたが、140ヘクタールに及ぶ広大な遺跡の11パーセントの調査を実施したにすぎません。しかし、これまでの調査は、幻の宮であった斎宮跡の実態を、徐々にではありますが、明らかにしつつあります。

特に今年度は、これまで通称中町裏で平安時代初めに造営されたとされてきた区画溝は、奈良時代末頃の光仁天皇期の酒人内親王もしくは桓武天皇期の朝原内親王の頃までの遡るのではないかと、文献に見られる斎王との関係で論じられるようになりました。また史跡西部で検出していた奈良時代の東西に走る溝は、中町裏まで真っ直ぐに伸び、区画溝が整備されるまでの、伊勢への官道ではないかという可能性も出てまいりました。

一方、博物館の活動の一つである博物館講座では、第一線で活躍していただける研究者を招き、昨年に引き続き斎宮と深い関連を持つ「古代官衙」及び「国府」についての講座を開催いたしました。また、好評をいただいている「体験発掘」も、地元明和町ばかりでなく、県下全域に対象を広げ、多くの参加を得ました。

これらの成果は、ひとえに地元明和町の方々の献身的な協力のおかげであります。ここに文化庁及び調査指導委員の諸先生の変わらぬご指導と、明和町をはじめとして関係各位のご理解に深く感謝を申し上げ、あいさつにかえさせていただきます。

平成3年3月29日

斎宮歴史博物館

館長 中林 昭一

例 言

1. 本書は、齋宮歴史博物館が、国庫補助金を受けて平成2年度に実施した史跡齋宮跡の発掘調査の概要である。
2. 明和町齋宮跡保存対策室（平成3年1月からは明和町教育委員会）が、国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更等緊急調査報告書は別に明和町が発行している。
3. 遺構実測図作製にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の座標は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分については、「齋宮の土師器（年報1984）」による。
5. 遺構表示記号は次の通りである。
SB；建物 SK；土埴 SD；溝 SE；井戸 SA；柵 SF；道路 SX；その他
6. 遺物実測図は、特に断わってない限り実物の4分の1である。
7. 写真図版で使用した遺物番号は、各次数の遺物番号と一致する。
8. 齋宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。
財団法人京都府理蔵文化財調査研究センター理事長 福山敏男氏
福山女学園大学名誉教授 久徳高文氏
国文化財保護審議会専門委員 坪井清足氏
京都府立大学学長 門脇禎二氏
名古屋学院大学教授 榎崎彰一氏
名古屋大学教授 早川庄八氏
皇学館大学教授 渡辺寛氏
千葉大学教授 北原理雄氏
三重大学教授 八賀晋氏
9. 本概報の執筆・編集は、齋宮歴史博物館調査課の谷本鋭次、倉田直純、上村安生、御村亮生、久保勝正があたり、中桐真紀、森脇景子、尾家恵がこれに協力した。

目 次

I 調査の経過と概要	1
II 第86次調査	3
III 第87次調査	27
IV 第88次調査	45

挿 図 ・ 表 目 次

〔表〕	1. 平成2年度発掘調査地区一覽	2
	2. 第86次調査時期別遺構分類表	4
	3. 第87次調査時期別遺構分類表	28
	4. 第88次調査時期別遺構分類表	46
	5. 掘立柱建物・堀一覽表	75・76
	6. 竪穴住居一覽表	77
	7. 斎宮跡発掘次数一覽表	78～81
〔図〕	1. 平成2年度発掘調査地区位置図	
	2. 第86次調査遺構実測図 (1:200)	5・6
	3. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6070・6065・6066・6030出土遺物)	11
	4. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6030出土遺物)	13
	5. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6015出土遺物)	14
	6. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6015出土遺物)	15
	7. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6005・6060出土遺物)	17
	8. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6045・6071出土遺物)	19
	9. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6039出土遺物)	20
	10. 第86次調査出土遺物実測図 (S K 6003・6007・6008・6013・6015・6030・6050・6060、pit、包含層出土遺物)	21
	11. 奈良時代後期～平安時代初期建物変遷図 (1:1500)	24
	12. 第I期の遺構配置図 (1:1500)	26
	13. 第87次調査遺構実測図 (1:200)	29・30
	14. 第87次調査出土遺物実測図 (S B 6125・6098出土遺物)	40
	15. 第87次調査出土遺物実測図 (S B 6105・6130出土遺物)	41
	16. 第87次調査出土遺物実測図 (S B 6110・161、S K 6163・6140出土遺物)	42
	17. 第87次調査出土遺物実測図 (S K 6149・6167・164・165、S D 206、包含層出土遺物)	43
	18. 第88次調査遺構実測図 (1:200)	47・48
	19. S K 6226・6227土層断面図 (1:40)	49
	20. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6225出土遺物)	55
	21. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6225出土遺物)	56

22. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6220・6228出土遺物)	58
23. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6226出土遺物)	60
24. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6226・6227出土遺物)	61
25. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6210出土遺物)	63
26. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6210・6221・6215出土遺物)	64
27. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 2798出土遺物)	67
28. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 2798出土遺物)	68
29. 奈良時代中期の土師器杯・皿	70
30. 第88次調査出土遺物実測図 (S K 6246・S E 6240)	71
31. 溝S D 170及び古道推定線	73
32. 南宮跡地区表示	82

写真図版

1. 第86次調査全景 (北から)、第88次調査全景 (南から)
2. 第86次調査全景 (北から)、第86次調査北半景 (南から)
3. 第86次調査S F 6009 (西南から)、S B 6000 (北から)
4. 第86次調査S B 6020 (北から)、S B 6055 (北から)
5. 第86次調査S B 5924・S K 6046・S B 6048 (北から)、S B 6010・S D 6050 (北から)
6. 第86次調査S K 6030 (北西から)、S K 6011～S K 6015 (南から)
7. 第86次調査S K 6060他土坑群、S K 6005、(北から)
8. 第87次調査全景 (北東から)、南調査区全景 (西から)
9. 第87次調査S B 6090 (西から)、S B 6090・6091・6098～6100 (南から)
10. 第87次調査S B 6092 (北から)、S B 6098・6099 (北から)
11. 第87次調査S B 6123・S B 6124・S K 6128 (北から)、S B 6135・S B 6105・S B 161 (北から)
12. 第87次調査S B 6165 (北から)、S B 6180 (北から)
13. 第87次調査S D 207 (南から)、S E 6101 (北から)
14. 第88次調査全景 (東から)、西半景・S A 2800 (北から)
15. 第88次調査S D 2404 (東から)、S B 6237・S B 6238 (北から)
16. 第88次調査S B 6233 (南から)、S B 6232 (南から)
17. 第88次調査S B 6234 (東から)、S B 6241・S B 6242 (東から)
18. 第88次調査S B 2390・S B 2391 (東から)、S B 6251・S K 2397・S K 2402 (北から)
19. 第88次調査S E 6240 (東から)、S K 6226・S K 6227土層断面 (東から)
20. 第86次調査出土墨書土器 (大炊・官・府・水鳥の絵・本あるいは奉・豊兆カ)
21. 上段: 第86次調査出土墨書土器 (三・周)、中段: 第87次調査出土石硯、陶硯、須恵器 (1:3)
下段: 第87次調査出土墨書土器 (武・大)
22. 上段: 第88次調査S K 6225出土土器、下段: 第88次調査S K 6210出土土器
23. 上段: 第88次調査S K 2798出土土器 (1:5)、下段: 第88次調査S K 6215出土土器 (1:5)

I 調査の経過と概要

昨年度西加座地区で実施した第83次・84次調査では、東西14間、南北12間の掘立柱塀による区画施設が確認されたのをはじめ、雨落ち溝あるいは薪垣のような施設の伴う大型掘形をもつ建物、東西130mの区画を二分する道路遺構、墨書土器「少光殿」など、遺構・遺物において数々の貴重な発見があった。

本年度第1回目の計画調査となった第86次調査は、このすぐ北側で約1,500㎡にわたって実施した。そのおもな目的は、掘立柱塀等による新たな区画の有無の確認と、昨年度調査で確認の掘立柱塀に囲まれた内部の建物群とこれに付随するであろう外部の建物群との関係、さらにはこれらの建物群の時期的な変遷を把握することであった。調査の結果、平安時代初期の大型掘立柱建物をもつ掘立柱建物を新たに7棟検出し、切り合い関係やその配置状況からこれらの建物が少なくとも4小期以上にわたり変遷することが確認された。ちなみに782年から809年の間に、朝原、布勢、大原、仁子の四人の斎王が卜定されている。4小期の建物をそれぞれの歴代斎王毎に建て替えられた建物とみれば、今まで平安時代初期と考えていた区画溝や大型で整然と配置された建物群の造営起源は、必然的に奈良時代末期あるいは後期まで遡せる必要が生じてきたことになろう。但しその画期を光仁朝まで遡らせるのか、桓武朝の長岡遷都と併行させるのかは、斎宮の土器編年観との問題もあり、もう少し検討したい。遺物では水鳥を描いた墨面土器や「大炊」「府」「官」「壘兆」といった墨書土器が目された。

第2回目の第87次調査は、宮城西部の塚山地区で約1,500㎡にわたって実施した。当調査区は、古里地区から東へ延びる鎌倉時代の古道が北と南へ分岐することが予想された場所で、ちょうどそのコーナー部分に当たる。また当調査区の東側では、昭和63年度から5ヶ年計画で上園地区芝生広場整備事業を継続して実施しており、斎宮歴史博物館へのアプローチ道路に面したこの一面の遺構状況を事前に把握し、将来の環境整備事業に関するデータを得ておく必要があった。調査は夏の暑い盛り7月17日から開始されたが、三度にわたる台風に見舞れ、調査は大幅に遅れ、終了したのは秋風の吹く10月22日であった。調査の結果、検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物・竪穴住居と鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物とに大きく二分され、宮城西部における普遍的な遺構状況であることがわかった。特に奈良時代前期の6間×3間の大型掘立柱建物や、溝により区画された中世の屋敷地を想定させる遺構が目をつけた。

毎夏開催している体験学習は、対象を明和町管内から松阪、伊勢管内在住の小中学生にまで広げ、公募という形をとり、8月1日～3日の3日間にわたり、父兄共ども40名の参加者を得て、当調査区及び斎宮歴史博物館内で実施された。またこれに先立ち7月25日から31日までは、

博物館実習生の現地実習も当地で行われた。

第3回目の計画調査となった第88次調査は、かつて区画溝、櫓列、大型倉庫群などが確認され、鍛冶山地区の中でも重要な一画とされていた第46次調査区の南側で、約1,250㎡の調査を実施した。調査の結果、櫓列SA2800は、さらに南側へ7間分延び、第83次調査で確認の櫓列SA5840よりさらに規模の大きな区画施設であることが確認されたほか、新たに2棟の大型柱掘形をもつ柱建物の検出や、当初予想もしていなかった古里地区から東南東方向に1km以上にわたりまっすぐ延びる道路遺構の確認など多くの成果があった。また遺物では、奈良時代中期の良好な一括資料を出土する土抗群が多数検出され、この時期の土師器編年の基礎ができたことも大きな成果の一つとなった。

上記計画調査のほかには当博物館調査課では、別表のとおり第85-1次～8次調査におよぶ8件の現状変更等に伴う緊急の事前調査も実施した。特に殿川を見おろす竹川の台地縁辺部で実施した第85-8次調査では、飛鳥時代に遡る可能性のある櫓列や、これと同方向の倉庫を中心とする掘立柱建物群が検出され、奈良時代以前の斎宮を考えるうえで貴重な成果が得られた。今後当該地区を含めた周辺地区での調査の進展が待たれるところである。

第1表 平成2年度発掘調査地区一覧

調査次数	調査地区	調査面積㎡	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	地区
85-1	6ABD 6ACD	303	2.7.10～ 2.11.2	明和町竹川字古里	三重県	泉道南藤原 竹川線拡張	3
85-2	6ACA -P	68	2.7.10～ 2.7.30	明和町斎宮字古里	松本 清	個人住宅新築	3
85-3	6ACJ -B・D	60	2.9.25～ 2.9.27	明和町竹川字東表	明和町	町道側溝新設	3
85-4	6ABE	95	2.11.7～ 2.11.15	明和町竹川573-1	永納 一義	盛土	3
85-5	6AED -U	260	3.1.10～ 3.1.25	明和町斎宮字楽殿 2885-2	西山 嘉治	盛土	3
85-6	6AFH -B	120	3.1.21～ 3.2.6	明和町斎宮西加座	明和町	防火水槽設置	2
85-7	6ACB -C	121	3.3.1～ 3.3.18	明和町斎宮塚山 3276-3他	加藤 正彦	個人住宅新築	3
85-8	6ABI -N	370	3.2.26～ 3.3.30	明和町竹川字中塚 内427-1	小林 文男	耕作土の 天地返し	3
86	6AFH- F～H	1500	2.4.18～ 7.7.2	明和町斎宮西加座 2679-1他	森下幸太郎 他	計画的な調査	2
87	6ACE- N・Q・R	1500	2.7.17～ 2.10.22	明和町斎宮字塚山 3356他	加藤 正彦 他	計画的な調査	1
88	6AGN -C・D	1250	2.10.19～ 2.12.27	明和町斎宮鍛冶山 2411-1他	服部 幸生 他	計画的な調査	2

Ⅱ 第 86 次 調 査

6 A F H - F · G · H (西加座地区)

本年度第 1 回目の調査として実施した第 86 次調査は、史跡の東部にあたる通称中町裏、西加座地区で実施したもので、調査面積は約 1,500m²、現況は畑地である。基本的層位は I；耕作土、II；灰褐色土、III；地山である。地山までの深さは 0.2～0.3m である。調査地は昨年秋から実施した第 83 次・第 84 次調査の北側にあたる。

昨年の調査では、掘立柱塼列と溝によって区画された東西 41.44m・南北 35.52m の方形の区画が検出され、その中に同時期の掘立柱建物が 2 棟確認されている。これらは中町裏に想定されている基盤目状の区画溝・道路の方向と一致している。更に昨年の調査では奈良時代後期から平安時代後期までの掘立柱建物や井戸が検出されており、遺物においても「目代」・「少允殿」などといった遺構の性格を考える上で重要な墨書土器が出土している。

このような状況から周辺地域においてどのような建物の配置が見られるか、また、今回の調査区の北端には区画溝と道路が想定されるがその状況はどうかなどを確認する事を調査の目的とした。

(1) 奈良時代後期の遺構

掘立柱建物 1、土坑 5、溝 2、この 2 つの溝を側溝とする道路 1 がある。

S B 6000 は調査区の南側で検出した 4 間×2 間の東西棟である。柱掘形は一辺 0.8m、深さ 0.6m の方形である。この建物の北側と南側で S D 6034 と S D 6035 の 2 条の東西溝を検出している。更に S D 6034 は途中で区切れており、その北に南北溝 S D 6033 がある。この 3 条の溝はほぼ垂直に掘られた溝の壁がしっかり残り、水が溜まったり流れた痕跡が無い点、溝の所々に窪みがあり、この埋土も溝と同じ黒色土で溝と同時に掘られている点などから当初は雨落ち溝と考えたが、塼あるいは垣のような施設と考えられる。

S K 6065・6066・6070 は調査区の西側にある。長径 3.0～3.6m、短径 2.0～3.0m、深さ 0.2～0.3m の不整楕円形を呈する。いずれも埋土は黒褐色土で土師器杯・壺・皿・甕、須恵器杯・壺・甕等を含んでいる。S K 6030 は調査区中央東側で検出した南北 3.0m、東西 2.5m、深さ 0.4m の楕円形を呈する土坑である。遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・鍋、須恵器杯・壺・広口壺・鉄鏝がある。S K 5923 は調査区の南端に第 84 次調査で検出されているものである。埋土は黒色土で、土師器甕が少量出土している。

S D 6002・6050 は幅 1.8m、深さ 0.4～0.5m の東西溝である。溝の埋土は暗褐色土・黒褐色土である。この溝は史跡東部で想定している基盤目状の区画のうち、1 番北と 2 番目を区画する

東西道路（SF6009）の北側溝と南側溝にあたる。この溝の間は心々で約12mある。SD6050からは土師器杯・皿・甕・鍋・甕、須恵器杯・蓋・甕・長頸壺が出土しており、「府」・水鳥の絵などの墨書土器もある。

(2) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物8、土坑10がある。

この時期の建物は3カ所で各々2～3棟重複して検出した。

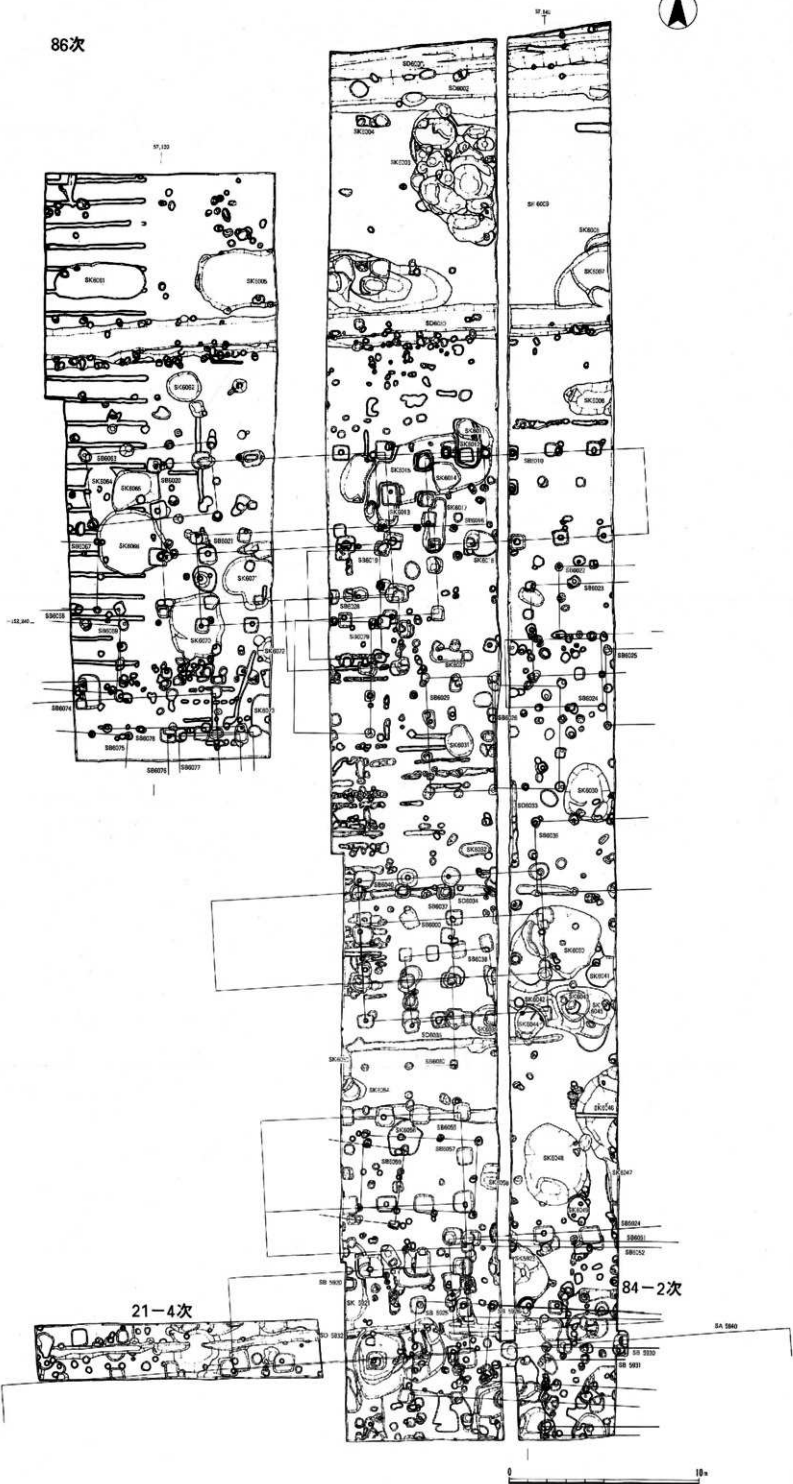
調査区の北にはSB6020・6021・6028がある。SB6020は区画溝SD6050から約5m離れて建つ東西棟の建物で規模は5間×2間、南面に廂をもつ。柱間は桁行2.4m、梁行2.4m、廂柱間は2.7mである。柱掘形は一辺0.9m、深さ0.7mの方形で、遺存状況の良い柱穴では建物の内側から東側に向かって柱抜き取り痕を検出している。SB6021はSB6020の建て替えと考えられる東西棟の建物で規模は5間×2間である。柱間は桁行2.5m、梁行2.4mである。柱掘形は一辺0.7m、深さ0.7mの方形である。柱痕跡が良く残っており、径0.2m程の柱が想定される。SB6028は更にSB6021の建て替えと考えられる東西棟の建物で3間×2間と想定される。柱間は桁行2.0m、梁行1.9mと規模が縮小される。

	遺 構 の 種 別		
	S B	S K	S D
奈良後期	6000	6030・6065・6066・6070・5923	6002・6033・6034・6035 6050・6009 (SF)
平安初期	6020・6021・6028 6037・6040・6055 6076・5920	6011・6012・6013・6014・6015 6018・6032・6046・6053・6054	
平安前I期	6051・6063・6068 6077・5924	6005・6017・6060・6016・6064	
平安前II期古	6010・6052	6041・6042・6043・6044・6045 6047	
平安前II期新	6019・6022・6023 6024・6025・6029 6067・6074・6075 6079・6080	6003・6006・6007・6008・6027 6048・6056・6058・6071・6072 6073	
平安中期	6016・6026・6036 6038・6057・6059 6069・6078	6031・6039・6049・6062	
平安後期		6004	6001

第2表 86次調査 時期別遺構分類表

86次

第2回 第86次遺構発掘面 (1:200)



21-4次

84-2次

S B6040はS B6020より南約15mに位置する。4間×2間の東西棟の建物で、柱間は桁行が2.4m、梁行2.7mである。柱掘形は一辺1.0m、深さ0.6mの隅丸方形である。S D6000を建て替えたものと考えられる。S B6037はS B6040の建て替えと考えられる東西棟の建物で規模は不明であるが、S B6021・5920と並ぶことから、5間×2間と想定される。柱間は、桁行2.5m、梁行2.4mである。柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5mの方形である。

調査区の南にはS B6055・5920がある。S B6055は東西棟の建物で、規模は4間ないし5間×2間である。南面に廂をもつ。柱間は桁行2.2m、梁行2.4mで、廂柱間は2.4mである。柱掘形は一辺1.0m、深さ0.5mである。S B5920は第84-2次調査で確認されている建物で今回の調査で時期を前I期から初期に変更した。5間×2間の東西棟の建物で柱間は桁行2.5m、梁行2.4mである。柱掘形は一辺1.3mと比較的大型の方形で、深さは0.7mである。

S B6076は西調査区の南端で梁行の柱通りのみ検出している南北棟の建物である。梁行は、1.9m、柱掘形は一辺0.7m、深さ0.5mである。

以上、初期の建物は8棟あるが、柱通りの方向はS B6028・6055・6076がE 3°N、N 3°W、その他がE 4°Nである。

S K6011～6015は区画溝S D6050から5m程離れた所にある重複した土坑である。埋土の切り合いはS K6015→S K6013→S K6014、S K6015→S K6011→S K6012である。S K6015は東西約8m、南北約3m、深さは0.5mである。黒褐色土の埋土からは、土師器 杯・皿・蓋・高杯・甕・鍋・竈、須恵器杯・蓋・甕などが整理箱で11箱分出土している。S K6013は、S K6015の西から中央にかけて鍵の字状に重複する土坑である。埋土は茶褐色土で、出土する遺物の構成はS K6015と同じで時期差もなく、整理箱で13箱分出土している。2つの土坑では杯・皿の供膳用土器の他に鍋・竈・甕の煮沸用土器が他の土坑より多く出土しているのが特徴的である。S K6015からはフイゴ羽口、S K6013からは「大炊」と墨書された土師器が出土している。なおS B6020・6021はこれらの土坑が埋没してから柱穴が掘られている。S K6011・6012・6014は長径1.4～2.5m、短径1.0～1.4mの不整楕円形を呈している。S K6012からは土師器甔や製塩土器が出土している。S K6018はこれらの土坑群の南約4mにある長径1.4m、短径1.2m、深さ0.1mの不整楕円形の土坑である。S K6032は、調査区のほぼ中央にある東西1.6m、南北0.7m、深さ0.2mの土坑、S K6053・6054は調査区の南西端にある土坑で更に西へ続く。埋土の切り合いからはS K6054の方が古い。これらの土坑からの出土遺物は土師器杯・皿・甕の破片であわせても整理箱1箱に満たない。

S K6046は調査区の南東端にある土坑で南北5.2m、東西は2.2mが確認されており、更に東へ続く。埋土は黒褐色土で、土師器杯・皿・高杯・甕・竈、須恵器杯・蓋・甕が整理箱で5箱分出土している。須恵器蓋の中には内面に墨痕が見られるものがある。

(3) 平安時代前期の遺構

この時期の遺構が調査区では一番多い。以下、前Ⅰ期・前Ⅱ期古・前Ⅱ期新に分けて述べることにする。

平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物5、土坑5がある。

掘立柱建物の配置は初期の建物をかなり意識したようで、初期とほぼ同じ位置で検出された。S B 6020と重複する位置でS B 6063、S B 6076と重複するのがS B 6077、この2棟の間にS B 6068が位置する。これらの建物の柱掘形は一辺0.5～0.7mの隅丸方形を呈し、柱間は桁行2.2m、梁行1.9mである。調査区の南端では第84-2次調査で検出されていたS B 5924とS B 6051が重複する。この2棟の建物は同じ位置での建て替えと考えられる。建物の規模は調査区の東に続くため定かでないが、S B 5924は第83次調査で検出しているS B 5812と梁行の柱通りを揃えることから、5間×2間の東西棟の建物であろう。柱掘形は一辺1.0～1.2m、深さ0.5mと比較的大型の方形である。柱間は桁行2.4m、梁行2.5mである。柱掘形の切り合いはS B 5924の方が古い。

S K 6061・6005は調査区の北端にあり、区画の東西道路S F 6009を掘り込む。S K 6061は東西5.7m、南北1.8m、深さ0.2mと浅い土坑であるが、S K 6005は東西10.7m、南北3.2mと大きく、深さも西で0.5m、東の深い所で約1mある。一部は区画溝S D 6050の埋土を切っており、この段階で既にS D 6050が埋まっていること、S F 6009が道路としての機能を果たしていないことが窺える。暗茶褐色土の埋土からは、土師器杯・皿・甕・鉢・甗・甔、須恵器杯・蓋・甕が整理箱で7箱分の遺物が出土している。

S K 6017・6064は南北1.3m前後、東西0.5m前後の土坑でどちらも深さ0.1mと浅い。

S K 6060は調査区の南にある。長径6.0m、短径4.0m、深さ0.3mの不整楕円形の土坑である。埋土は上層が暗茶褐色土、下層が暗褐色土で堆積の違いで出土遺物に時期差は無く、土師器杯・皿・高杯・甕・短頸壺、須恵器杯・蓋・甕・長頸壺の他、3個体以上の製埴土器が北東の隅でまとまって出土している。

平安時代前Ⅱ期(古)の遺構

平安時代前Ⅱ期については、共伴する灰釉陶器から、黒笹14号窯式の新しい段階のものと黒笹90号窯式のものが入る時期を古く、黒笹90号窯式だけが共伴する時期を新しく、2つの時期に分けて述べる。

掘立柱建物2、土坑6がある。

掘立柱建物はこの時期まで初期の建物を意識している。S B 6010はS B 6020のすぐ西に建つ東西棟の建物で更に東へ続くため規模は不明であるが、柱掘形は一辺0.8m、深さ0.4mの方形

である。柱間は桁行、梁行ともに2.3mである。S B6052は調査区の南端にあり、S B6051の建て替えと考えられる建物である。柱間は桁行2.0m、梁行1.9mと小さくなる。

土坑は前I期のS K6060のすぐ南にS K6041～6045があり、S K6042→S K6043→S K6045、S K6042→S K6044という埋土の切り合い関係で重複している。遺物はS K6045から土師器杯・皿・鉢・甕・甕、須恵器杯・蓋・甕が整理箱6箱分出土している。S K6047は調査区の南東隅にある土坑で更に東へ続き規模は不明である。

平安時代前II期(新)の遺構

掘立柱建物11、土坑11がある。

掘立柱建物はS B6080が調査区の南にある他は、調査区の中央に10棟が集中する。建物の規模は不明なものもあるが、概ね3間×2間で、柱間は1.7～1.9mとなり前代までよりも縮小される。また、柱掘形も0.4m前後の丸型となり小さくなる。S B6019とS B6079の2棟の南北棟建物が重複し、S B6022～6025の4棟の東西棟建物が重複することから少なくとも4時期くらの建物変遷が考えられる。

土坑S K6003・6006・6007は調査区の北にあり、道路S F6009を掘りこんでいる。特にS K6003は南北約8m、東西約5mの不整楕円形を呈し、同時期の土坑がいくつも重複しているものと考えられ、深い所では1.3mもの深さがある。遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器壺、灰軸陶器碗・皿が整理箱で4箱分出土している。灰軸陶器皿の底部外面には「周」の墨書が見られる。また、S K6007出土の土師器杯の底部外面には「官」の墨書が見られるものがある。

S K6008はS K6007の2.5m程南にある調査区の東に続く土坑で土師器杯・皿・甕、須恵器壺、灰軸陶器段皿、黒色土器碗が整理箱で1箱分出土している。

調査区の中央の掘立柱建物が集中しているあたりには、S K6027・6071・6072・6073がある。S K6071は東西、南北とも1.4mであるが、不整形な土坑で、深さは0.2mと浅いが土師器杯・皿を中心として、鉢・甕、須恵器壺、灰軸陶器碗、緑軸陶器皿が整理箱で9箱分出土している。その他の土坑からの遺物は少なく、あわせても整理箱1箱分である。

調査区の南にはS K6048・6056・6058がある。S K6048は南北4.3m、東西3.3mの不整楕円形の土坑で深さは0.3mである。土師器杯・皿・甕、須恵器壺、灰軸陶器碗・段皿が整理箱8箱分出土している。その他の土坑からの出土遺物はほとんどない。

(4) 平安時代中期の遺構

掘立柱建物8、土坑4がある。

掘立柱建物は前II期の新しい時期の配置を意識しているようで、調査区の中央にS B6026・6036・6069・6078があり、更に北にはS B6016、南にはS B6038・6057・6059がある。これらの建物のうち、S B6038以外は前代の建物と規模、柱間、柱掘形の形など同じである。

S B6038は一辺0.6m、深さ0.6mの方形の柱掘形をもつ建物である。東側の梁行は2間、西側の梁行は3間と不揃いである。桁行は3間であるが、南側の桁行のうち中の2穴は布掘りである。

土坑は調査区の北から南にS K6062・6031・6039・6049が点在する。いずれも長径1.8m、短径1.5m、深さ0.2mの不整楕円形の土坑でS K6031からは土師器杯・皿・甕、黒色土器碗、灰釉陶器碗が整理箱1箱分、S K6039からは土師器杯・皿・台付皿・甕が整理箱2箱分出土している。

(5) 平安時代後I期の遺構

土坑1、溝1がある。

S K6004は調査区の北にある東西1.0m、南北0.6mの小さな土坑である。少量の土師器杯・甕、灰釉陶器碗が出土している。

S D6001は調査区の北側にある溝で、溝の幅は更に北まで続くので不明である。溝の埋土はS D6002の埋土を切っている。出土遺物には、土師器杯・皿・甕、クロロ土師器、須恵器杯・甕、灰釉陶器碗があるが整理箱1箱分と少ない。なお、この溝が完全に埋まるのは平安時代末期である。

(6) 遺物

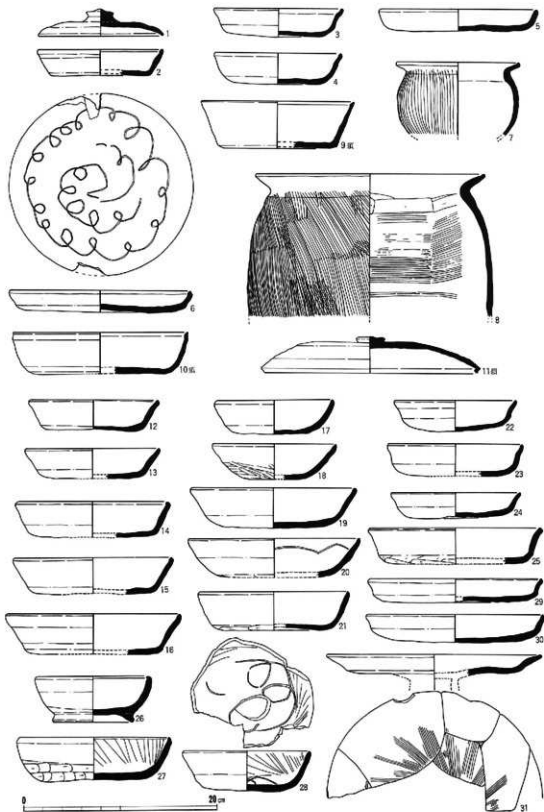
今回の調査で出土した遺物は整理箱で約180箱ある。奈良時代後期から平安時代後期まで各時期を通して土坑からまとまった遺物が出土している。

S K6070出土の遺物には土師器杯・蓋・皿・甕・甕、須恵器杯・甕がある。杯・皿ともに底部をヘラケズリせず、ナデで調整し、口縁部のみヨコナデする奈良時代後期でも新しい様相を持つものである。杯には底部と口縁部の境が明瞭になり、口縁部が直線的に外へ開く(2)と境は明瞭でなく、口縁端部が外反し受け口状になる(3)、口縁端部が内弯気味になる(4)がある。蓋(1)は外側がナデ調整されるもので、口径13.6cm、器高2.8cmである。皿には底部と口縁部の境が明瞭でなく、口縁端部が丸く終わる(5)と境が明瞭になる(6)がある。

(6)は内面に標識状暗文がある。甕には、口径12.8cmと小型で丸い(7)と長胴甕(8)がある。須恵器には杯(9)がある。口径16.0cm、器高4.9cmのもので、折戸10号窯式の時期のものである。須恵器はこの他、S K6065から杯(10)が、S K6066から蓋(11)が出土している。いずれも、鳴海32号窯式の時期のものである。

S K6030出土の遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・鍋、須恵器杯・広口甕、鉄鍔がある。

土師器杯は底部と口縁部の境が明瞭なもの(12~16・25)とそうでないもの(17~24・27・28)、さらには高台が付くもの(26)に分けられる。(12・13)は口縁部が弱く外反し、端部は内弯気味となるものである。口径は13.0~14.0cmで器高は3.0cm前後である。(14~16)は口



第3圖 第86次出土遺物 S K 6070 ; 1 ~ 9、S K 6065 ; 10、S K 6066 ; 11、S K 6030 ; 12 ~ 31

縁部がほぼ直線的に外へ開き、端部は内弯気味となるものである。(14・15)は口径が15.0～17.0cmで器高が3.8cm前後の中型のものである。(16)は口径17.8cm、器高4.3cmと大型のものである。(17)はいなか風碗で、この時期くらいまでで消滅する。(18～20)は長めの口縁部が外方へまっすぐに開くもので、(18)は口径13.0cm、器高3.8cmと小型であるが、(19・20)は口径17.0～17.8cm、器高4.2cm前後と大型である。(21・28)は(18～20)ほど口縁部が外へ開かずまっすぐのびるものである。(22～24)は口縁部が外反し端部は受け口状になるものである。口径は12.4～13.8cmで小型である。(24)は器高2.7cmと浅い。(27)は口縁部が内弯気味に立ち上がるものである。(25)は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は面をもつものである。明るい赤褐色をしており、焼成も硬くしまっている。これらの杯の器面の調整方法は(18・20・21・25・27・28)は底部外面をヘラケズりするb手法で、その他はナデ押さえするe手法である。(20)には螺旋状暗文が、(27)には荒い放射状暗文があり、(28)には両方が見られる。

皿は杯の口縁部形態に対応して、外反しさらに端部がやや内弯する(29・30)がある。ただし、(29)は平坦な底部であるが(30)の底部は丸く全体に厚手である。

(31)は高杯で杯部の裏にはハケメがある。

甕は口径24.8～27.0cmの大型のもの(32～34)と口径16.0cmの小型のもの(35)があるが、(32・33)は長胴甕、(34)は球形に近い体部になるものであろう。

鍋は口径24cm前後のもの(36)、30cm前後のもの(37)、46cm前後のもの(38)と大・中・小の三種類があるが形態はすべて同じである。

須恵器には、蓋(39)、杯(40)、広口壺(41)がある。鳴海32号窯式の時期のもので、土師器の時期よりやや古いものである。

平安時代初期の土坑S K 6015出土の遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・鍋・甕、須恵器杯・蓋・甕がある。

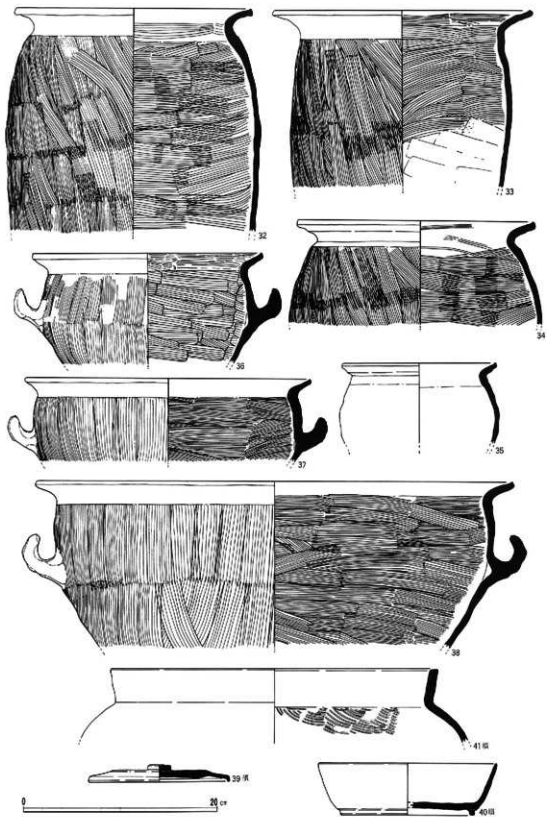
土師器杯には口縁部が外反し、端部が内弯する(42～45)、口縁部が直線的に外へ開く(48・49)、底部が丸く厚手で深い(46・50)、口径11.2cm、器高1.7cmとこぶりで浅い(47)がある。前代のものとは比べ、口縁部が外反するものは屈曲が鋭くなる。また、器面の調整方法はe手法が圧倒的に多く、僅かにb手法のもの(45)が見られる。

皿は杯の口縁部形態に対応し、外反しさらに端部が内弯する(52)、端部に面をもつ(53)、奈良時代的な(51)がある。いずれも、e手法で調整されている。

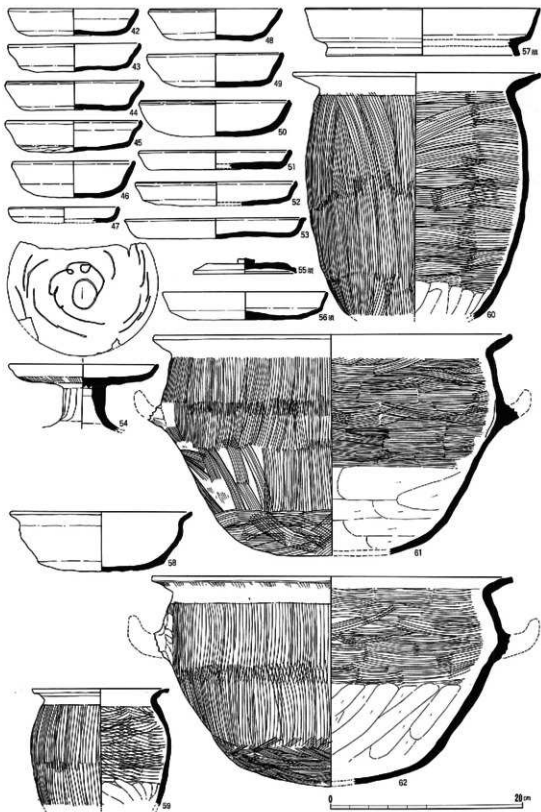
高杯(54)は面取りした短い脚をもち、杯部には螺旋状暗文が見られる。

甕は(58～60)があるが、(58)は鍋に近い形態のもので外面には煤が付着している。

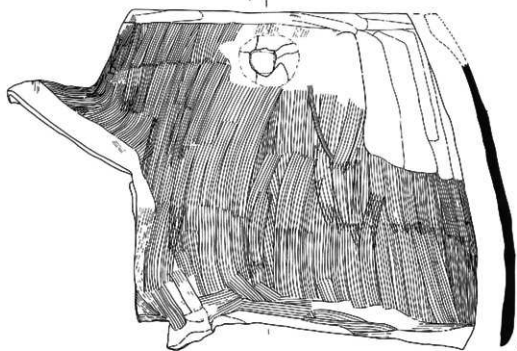
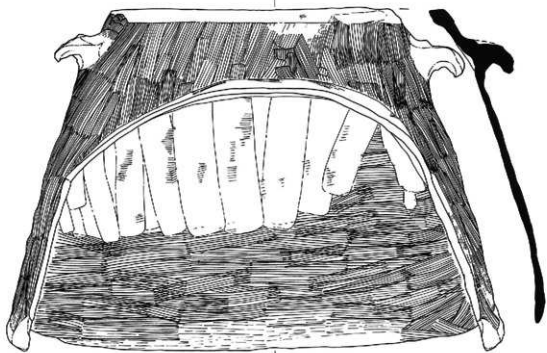
鍋は口径37cm前後、器高23cm前後の大型のもので(61・62)ともに体部外面は細かい縦ハケ



第4図 第86次出土遺物 S K 6030 ; 32~41



第5図 第86次出土遺物 S K 6015 ; 42~62



第6图 第86次出土遺物 S K 6015 ; 63

メ、底部もハケメ調整をする。内面は体部の上方を横方向のハケメ調整し、底にかけては縦方向のヘラケズリを施している。

甕 (63) は器高35.9cmではほぼ完形のものである。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメの後、上半を縦方向にヘラケズリしている。

須恵器には蓋 (55)、杯 (56・57)がある。折戸10号窯式の時期のものである。

平安時代前I期ではS K 6005・6060からまとまった遺物が出土している。

S K 6005出土の遺物には土師器杯・皿・甕・鉢・甕・甗、須恵器杯・蓋・甕がある。杯には口縁部が外反する (64-69)、底径が小さく口縁部がまっすぐのびる (70-72)、口縁部が内弯気味に立ち上がり器高4.7cmと深い (73)がある。(64-69)は前代のものより口縁部の開きが外へ開くようになり (64・65)などは屈曲が大きくなる。器面の調整方法はすべてe手法に統一される。

皿 (74)も外反するものであるが杯に対応して口縁部の開きは外へ開く。

甕 (76)は口径16.4cmの小型の球形に近い甕である。

鉢 (77・78)は体部の丸いものである。

黒色土器碗 (75)は内面のみ黒い所謂、黒色土器A類である。外面はヘラケズリの後、荒いヘラミガキを行っている。内面のヘラミガキは放射状に行われている。

須恵器には杯・蓋・甕があるが図示しえたのは甕 (79)だけである。

S K 6060出土の遺物には土師器杯・皿・高杯・甕・短頸壺、須恵器杯・蓋・甕・長頸壺、製塩土器がある。

土師器杯は底径が小さく口縁部がまっすぐのびるもの (80-89)が多く、口径により大中小に分かれる。口縁部が外反するもの (90-92)は少ない。(80-89)は口径が12.2-12.6cmで器高が2.9-3.3cmのもの (80-86)、口径が13.8cmで器高が3.5cmのもの (87)、口径が16.4cmで器高4.7cmと深いもの (88)、口径が16.6cmで器高が3.9cmのもの (89)に分かれる。

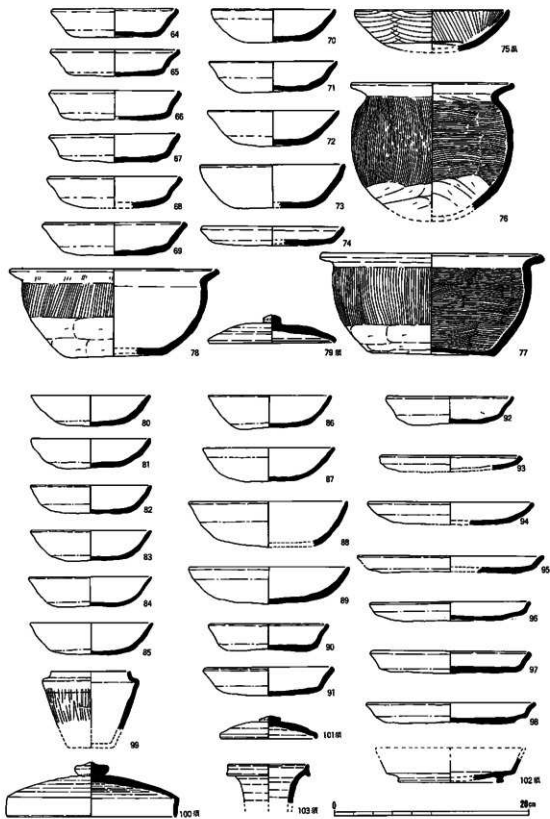
皿は断面弓状になるもの (93-94)が見られるようになる。口縁部が外反するものは、まっすぐのびるもの (95-96)、端部が内弯するもの (97)、底部と口縁部の境が屈曲するもの (98)に分かれる。器面の調整は杯・皿ともにe手法である。

短頸壺 (94)は口径8.0cmで外面には粗いハケメが見られる。

須恵器には杯 (102)、蓋 (100・101)、長頸壺 (103)がある。

S K 6005とS K 6060の杯・皿を比べるとS K 6060出土の杯は口縁部がまっすぐのびるものが中心となり、しかも、薄手になっている。また、皿では断面弓状になるものが見られることからS K 6060の方が新しいと考えられる。

平安時代前II期の古い時期ではS K 6045から、新しい時期ではS K 6071からまとまった遺物



第7図 第86次出土遺物 S K 6005 ; 64~79、S K 6060 ; 80~103

が出土している。

S K 6045出土の遺物には土師器杯・皿・鉢・甕・甗、須恵器杯・蓋・甕がある。

土師器杯は底径が小さく口縁部がまっすぐのびるものが主体的になる。口径9.8～10.4cmで器高3.0cm前後のもの（104・105）、口径12.4～12.6cmで器高3.2cm前後のもの（106～108）、口径13.8cmで器高3.3cmのもの（109）、口径16.6cmで器高4.1cmのもの（110）に分かれ、前代のもとの法量的には大差がなく、口径10cm前後の小型のものが新たに見られる。また、形態的にも古く、螺旋状暗文をもつ（111・112）のような杯も僅かだがある。

皿は前代に一部見られた断面弓状になるものが主体的になる。口縁部がまっすぐのびる（113～117）のほか、底部が平坦で口縁部が内弯気味に立ち上がる（118）、まっすぐ外方に開く（119）、外反する（120）など古い形態のものも僅かに残る。（116・117）は口径が20cm前後の大型のものである。

須恵器には杯・蓋・甕があるが図示しえたのは甕（121）だけである。

S K 6071出土の遺物には土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器蓋、灰釉陶器碗・段皿、緑釉陶器皿がある。

土師器杯は底径が小さく口縁部がまっすぐのびるものであるが、口縁端部の形態によって外反するもの（122～126）、まっすぐなもの（127～133・138）、外反し端部に面をもつもの（134～136）、器高が5.1cmと深く碗に近いもの（137）がある。器面の調整方法はすべてe手法である。各形態とも口縁部のヨコナデの範囲が器高の3分の1のもの2分の1のものがあリS K 6071出土の杯74個体中前者が31%、後者が69%ある。なお、外反し端部に面をもつものは形態として意図的なものか、ヨコナデの際の偶然によるものか判断し難いが、74個体中約8%に見られる。

皿（139～143）は杯の口縁部形態に対応する。（143）は器高が2.4cmと深く、口縁部が屈曲し外反するものである。杯と同様に口縁端部を外へ引き出すようにして面をもつものは49個体中約8%ある。鉢（144）は体部がやや直線的になる。

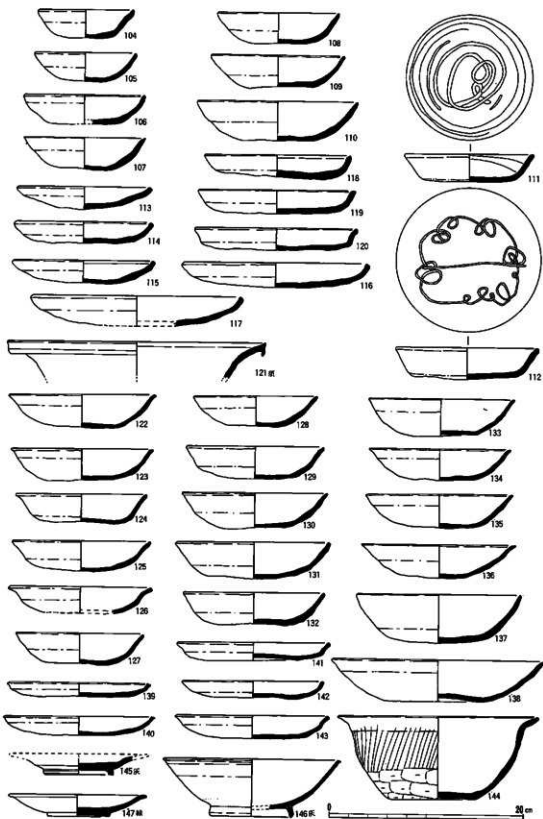
灰釉陶器には碗（146）・段皿（145）がある。いずれも黒笹90号窯式の時期のものである。

緑釉陶器皿（147）は京都産のものである。高台は平高台に削りだしている。

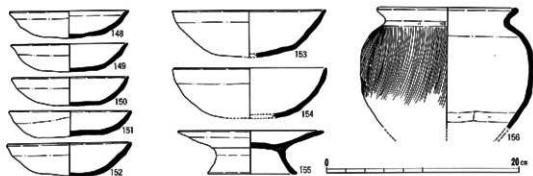
平安時代中期の遺物はS K 6039から土師器杯・皿・台付皿・甕が出土している。

土師器杯（148～154）は口縁部がまっすぐのびるもので、口縁部のヨコナデの範囲は3分の1と狭くなり、白っぽい色調のものが多い。（148～152）のように口径が12.0～12.8cmのものが主体的となり縮小化が進む。（155）は高台の付くものである。

甕（157）は口径14.0cmの小型で球形に近いものである。



第 8 图 第86次出土遺物 S K 6045 ; 104~121、S K 6071 ; 122~147



第9図 第86次出土遺物 S K 6039 ; 148~156

特殊な遺物には、墨書土器22点、ヘラ描き土器2点、緑釉陶器58点（うち印刻のあるもの1点）、円面硯5点、転用硯7点（うち朱の付着するもの2点）、鉄製品9点、瓦3点、砥石3点、尖頭器1点、フイゴの羽口5点、ミニチュア土器8点がある他、製塩土器が整理箱で2箱分ある。

墨書土器のうち判読できるものには「府」（161）・「ニカ」（162）・水鳥らしい鳥の絵の墨書（183）—S D 6050出土、「三」（158・159）—S K 6015出土、「大炊」（157）—S K 6013出土、「豊兆カ」（164）—S K 6030出土、「官」（160）—S K 6007出土、「周」（165）—S K 6003出土、「本あるいは奉」（163）—包含層出土がある。これらの内、特に「大炊」の墨書は「炊部司」を実証する資料となる。

円面硯のうち（175）は海と陸の部分約半分残存している。脚部には長方形の透かしがあったと思われ、その数は11と推定される。（176）は海と陸と脚の一部が残存しており、脚部には透かしと沈線が見られる。いずれも包含層から出土している。

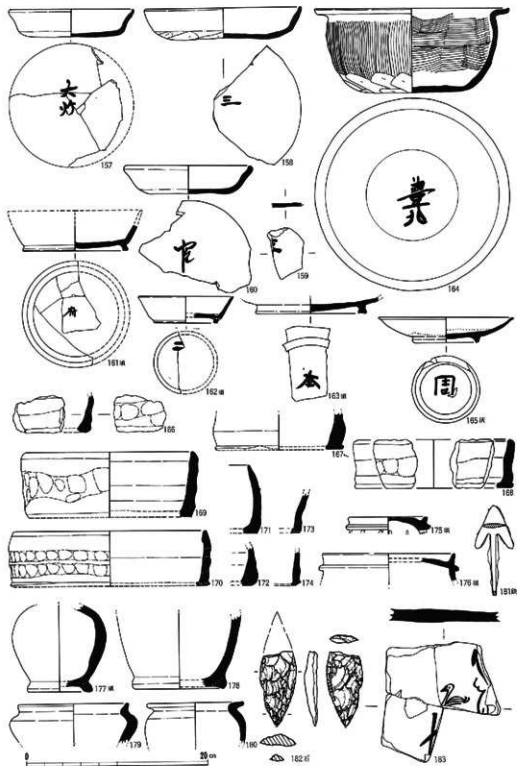
ミニチュア土器には、土師器壺（178）・短頸壺（179）・甕（180）・甕、須恵器壺（177）がある。（178）はS K 6013出土、（179）はS K 6045出土、（177・180）は包含層出土である。

製塩土器は整理箱で2箱分出土しているが、その中で平安時代前I期のS K 6060から出土しているものが過半数である。

奈良時代後期のS K 6030からは（174）が出土している。体部は粘土紐輪積みで体部と底部の接合方法は、底部端に体部をのせるものである。色調は黄褐色で胎土には1~2mmの砂粒を含んでいる。時期的には8世紀第4四半世紀前半に属する。

平安時代初期のS K 6013からは（167）が出土している。成形手法は（174）と同じであるが、体部が外方へ開く。また、ユビオサエの痕が目立つ。色調は橙褐色で胎土には砂粒を含まず精良である。時期的には8世紀第4四半世紀後半から9世紀第1四半世紀前半である。

平安時代前I期のS K 6060からは（169~171）が出土している。土坑の北東隅でまとまって出土しているものである。（169）は口径18.2cm、器高7.3cmで体部は外反し口縁端部で最大径



第10図 第86次出土遺物 S K 6003 ; 165・167、SK6007 ; 160、S K 6008 ; 168、S K 6013 ; 157・166・178、S K 6015 ; 158・159、S K 6030 ; 164・174・181、S D 6050 ; 161・162・183、S K 6060 ; 169~171、pit、182、包含層 ; 163、175~177・179 (177~180・182・183は1 : 2)

となる。色調は黄褐色で胎土には砂粒を殆ど含まず精良である。(170)は口径21.2cm、器高6.2cmで体部は僅かに傾斜し口縁端部は内弯する。体部の中央付近で最大径となる。色調は黄褐色で胎土には2～3mmの砂粒を多く含む。(171)は口径は不明だが器高は7.5cmである。体部は内弯するもので体部の中央付近で最大径になり、口縁端部は細くなる。色調は黄褐色で胎土は砂粒を殆ど含まない。成形手法は(174)と同じと思われ、特に(170)は4段の粘土紐が輪積みされている。時期的には8世紀第1四半世紀後半から第2四半世紀である。

平安時代前Ⅱ期の新しい時期のSK6003から(167)、SK6008から(166)、SK6048から(171・174)が出土している。(167)は底径が14.0cmで体部の下が厚く中央付近で脹らみ、口縁端部で薄くなるものである。色調は橙褐色で胎土には2～5mm砂粒を含んでいる。粘土紐の接合が確認できないので板状の粘土で体部を作り、底部と接合したものであり、他の3点も同じである。(168)は口径16.6cm、器高5.4cmのもので体部は直立気味である。色調・胎土・成形手法は(167)と同じである。(172)は体部の下が厚く、口縁端部にかけて薄くなり、外面は内傾する。胎土は1～2mmの砂粒を少量含む。色調は乳褐色である。(173)は体部が外反し口縁端部で最大径となると思われる。色調は橙褐色で胎土には1～2mmの砂粒を多く含み、底部と体部の外面には粉靨痕がある。

鉄製品にはSK6030から出土した鉄鏃(181)の他に、釘、刀子等がある。

石製品には旧石器時代から縄文時代早期に属すると思われる尖頭器(182)がある。

(7) まとめ

今回の調査では、奈良時代後期から平安時代初期の遺構・遺物に注目される成果があった。これらについて、昨年度実施した第83次調査、84-1次・84-2次調査の成果もあわせて考えたい。

まず、奈良時代後期から平安時代初期の時期について再検討の結果、従来、奈良時代末期から平安時代初期と考えてきた土器の年代については長岡京の造営が始まる784年前後から、平安京遷都の794年までの所謂、長岡京の頃と考える。今回の調査ではSK6030・6070出土の土器がこの時期にあたる。この時期に底部と口縁部の境が明瞭になり、口縁部が直線的に外へ開くものや、口縁部が外反し、端部が内弯気味になる平安型の杯があらわれる。そして、この時期の器面の調整方法は、まだb手法が主体的であるがe手法のものが見られるようになる。これに対して、平安時代初期になるとe手法が主体的になり、底部と口縁部の境もより明瞭となり、口縁部の屈曲もより鋭くなる。また、底径が小さく長めの口縁部がまっすくのびる椀に近いものがこの時期から現れる。今回の調査ではSK6015出土の土器がこの時期にあたる。このように今回の調査では奈良時代後期から平安時代初期にかけての斎宮の土師器の編年観については得るものがあった。また、後述の第88次調査では奈良時代中期の良好な一括資料を出土する土坑群を多数検出しており、斎宮の土師器編年の基礎資料を得ている。

このような年代観から、今回の調査地を含む通称中町裏と呼ぶ、史跡東部における奈良時代の遺構を検討した結果、中期の掘立柱建物が7棟、末期を含む後期の掘立柱建物が64棟あることが分かった。また、第84-1次調査で検出したS D5870出土の遺物についても奈良時代のものが主体的であり一部は奈良時代中期の後半頃まで遡ると考えられるものもあることから、溝の掘削された時期は奈良時代後期まで遡ると考えたい。今回の調査で検出した区画溝（道路側溝）S D6002・6050もこの時期である。中町裏のこの時期の掘立柱建物の柱通りの方向は区画溝の方向と一致するE 4°Nのものが多く、こういったことから、区画溝と道路によって基盤目状に区画された斎宮の造営の時期は奈良時代後期と考えられる。

昨年度の2次にわたる調査では、塀あるいは垣のような施設と考えられる溝を周囲に持つ掘立柱建物S B5780・5820とこれらの建物を取り囲む掘立柱塀による区画を確認し、この時期を平安時代初期と考えた。これは、溝および柱掘形から出土する遺物が殆どなく、区画溝と方向が一致することから区画溝の時期とあわせてためである。よって、この一郭の時期を奈良時代後期と考え直したい。

今回の調査では、奈良時代後期の掘立柱建物1、平安時代初期の掘立柱建物8を検出した。昨年度検出した建物を含めて、その変遷を考えたい。

まず、第83次調査ではS B5780→S B5810、S B5780→S B5800、S D5832→S B5835という埋土の切り合い関係が認められる。第84-2次調査ではS A5840→S B5920、第86次調査ではS B6000→S B6040→S B6037、S B5920→S B6055、S K6015→S B6020→S B6021という切り合い関係が認められる。これらを建物の棟方向、柱通り、規模なども考慮して整理すると以下ようになる。（第11図参照）

I期……周囲に溝をもつ建物の時期。

規模は4間×2間。E 4°N、N 4°Wの棟方向。

S B5780・5820・6000、S A5840、S D5832がある。

II期……規模は5間×2間、4間×2間。E 4°Nの棟方向。

S B5810・6020・6040がある。

III期……並行して建つ建物群の時期

規模は5間×2間。E 4°Nの棟方向。

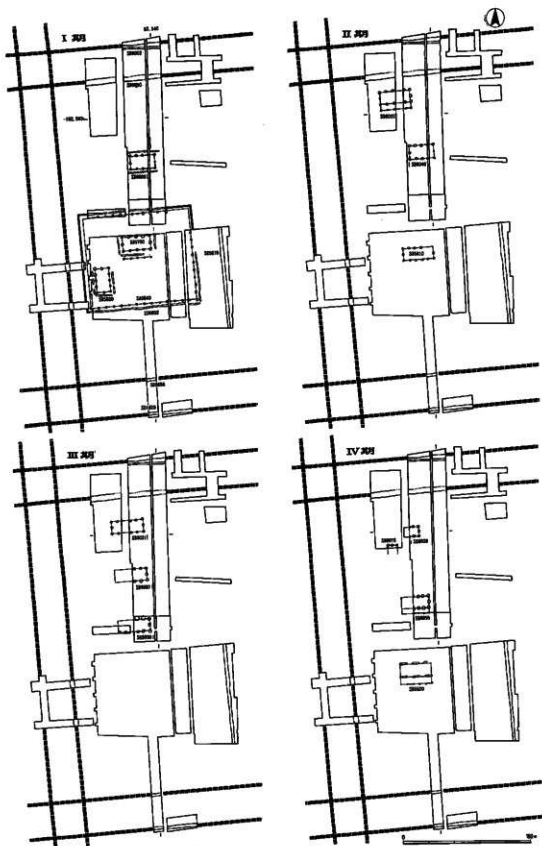
S B5920・6021・6037がある。

IV期……建物の方向が変わる時期。

規模は5間×2間、3間×2間。E 3°N、N 3°Wの棟方向

S B5800・6028・6055・6076がある。

以上のようにまとめられるが、S B6035については4間×2間の規模で棟方向はN 0°でI期



第11圖 奈良時代後期～平安時代初期建物変遷圖 (1 : 1500)

よりは新しいがどの時期になるか不明で他に同時期の建物は無い。

さらに、周辺の他の区画もあわせて検討してみると、E1`N、E2`Nの棟方向でまとまる建物の時期がある。これらの建物の時期については、直接今回の建物の時期との前後関係は不明であり、奈良時代後期から平安時代初期にかけて6時期くらいの建物変遷があると推定される。

さて、この基盤目状の方形区画の造営の初現はいつ頃であろうか。そのひとつの考えとしては次のものがある。

『統日本紀』の771(宝亀2)年11月18日の条には「鍛冶正從五位下氣太王を遣して齋宮を造らしむ」とある。これが、造齋宮使の初見であり、また、遺構の分布、時期からいってもこの頃に造営されたと考えられる。光仁天皇が770年に即位し、称徳天皇・道鏡による仏教政治を排除しつつある時代であり、齋王の卜定さえなかった称徳天皇の時代から心機一転、齋宮寮を造営し直した可能性は十分考えられる。

今回の調査では少なくとも4時期の建物の変遷が考えられるが、このような建て替えは、齋王の交替、災害による倒壊、火事による炎焼、老朽化等が考えられる。

現在の齋宮の土器の編年観では平安時代初期を815年頃までと考えており770年頃から815年頃の間には酒人・朝原・布勢・大原・仁子の各内親王5人、光仁朝の淨庭女王を含めると6人の齋王がいたことになる。齋王が交替するたびに確実に建て替えが行われたとすれば、これだけで5ないし6時期ある。これらと発掘調査による建物の変遷がどう対応するかは区画全体を検討して考えていかなければならない問題である。ちなみに、今回の調査では奈良時代の酒人内親王から朝原内親王までの時期の建物はI期だけで平安時代に入る布勢内親王以後の建物はII期からIV期の3時期が考えられる。なお、この間『統日本紀』には775(宝亀6)年8月22日の条に「使を遣わして伊勢の齋宮を修理せしむ」、785(延暦4)年4月23日の条には「從五位上紀朝臣作良を造齋宮の長官となす」とあり、修理ないしは建て替えが行われていることは確実である。

今回の調査ではこの区画の北に走る東西道路を検出した。道路の幅は内々で約11mである。第83次調査ではこの区画の南に走る東西道路を検出しており、その道路の幅は内々で約12mであったことと比べると今回の道路のほうがやや狭い。これまでの調査で確認されている道路幅も概ね内々で約12mのものが多く、これは、齋宮の造営の基準尺と考えられる1尺=29.6cmでほぼ40尺にあたる。なお、第83次調査で検出した東西道路の北側溝S D5858と今回の調査で検出した東西道路の南側溝S D6050の距離は内々で118.6mあり、ほぼ400尺にあたる。また、今回の調査で検出したI期の遺構の配置は第12図のように規則的であることから、I期の遺構は史跡東部での最初の齋宮造営によるものであり、それは、氣太王による齋宮造営と考えたい。

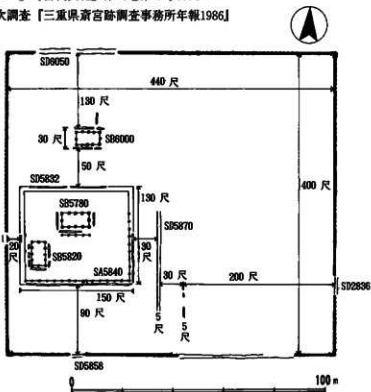
遺物については、墨書土器に注目される資料がある。

S K 6013出土の土師器杯の底部外面に見られる「大炊」の墨書は炊部司を実証する遺物であるが、これまで炊部司に関連するものとしては第69次調査出土の土師器杯に「炊」と墨書したものがあり、今回で2点目である。なお、第69次調査は今回の調査地より約400m東にあたる。SD6050からは鳥を描いた土師器が出土している。首の長い水鳥らしく斎宮跡では初めての出土である。

平安時代前I期の土坑S K 6060からは整理箱1箱分の製塩土器が出土している。今回の調査では奈良時代後期の土坑S K 6030からも製塩土器が出土しており、斎宮における出土例はこの時期までは遡れる。斎宮において製塩土器の出土する遺構、時期、出土量等の統計的な調査はしていないが、史跡の東部地区に多く見られ、前II期の土坑からまともな出土する例が多いようである。

〔注〕

- ① 第83・84-1・84-2次調査『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館1990
- ② 田阪 仁・泉 雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から—史跡東部の区画造営プランをめぐって—」『古代文化』第43巻第4号1991
- ③ 第69次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1986』



第12図 第I期の遺構配置図 (1:1500)

Ⅲ 第87次調査

6ACE-N・Q・R (塚山地区)

第87次調査は7月17日から史跡西部で字齋宮塚山3351番地他で実施した。現況は畑地である。過去の調査結果から区画溝の北西隅から延びる鎌倉時代の溝が当調査地付近で南側へ曲がるとされていたので、その事実を確認するためと、また、調査地の南側を走る古道沿いには、奈良時代、鎌倉時代中心の遺構が多く確認されていたのでその実態を再度確認するために当地が選ばれた。

周辺では、すぐ東側で第82次調査(平成元年度)、南東では第49次調査(昭和58年度)が、西側で、第32次調査(昭和55年度)などが実施され、調査地内で第87次トレンチ調査(昭和49年度)及び第8-5次トレンチ調査が実施されている。第82次調査では、奈良時代を中心とする掘立柱建物が14棟検出され、第49次調査では、奈良時代、鎌倉時代の掘立柱建物6棟と溝が検出され、この周辺が奈良時代及び鎌倉時代の齋宮を考えるうえで重要な地域であることが判明している。

調査区は、南北52m、東西35mを設定した。調査面積は、約1500㎡である。なお、今回中央に畦を挟むため調査区は北調査区と南調査区に分かれる。遺構は、包含層(黒褐色土)直下の地山面で検出した。検出した主な遺構は、奈良時代、鎌倉時代を中心としたもので、奈良時代の掘立柱建物12、竪穴住居11、土坑10、平安時代の掘立柱建物8、土坑7、鎌倉時代の掘立柱建物11、土坑24、溝4、井戸3、室町時代の土坑13、溝10、井戸1があげられる。

(1) 奈良時代前期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物4、竪穴住居11、土坑9がある。

掘立柱建物S B6090・6091は北調査区の北端に位置する。S B6090は、6間×3間の大型の東西棟で、柱掘形は一辺0.5m、深さ0.5mである。過去齋宮において奈良時代の掘立柱建物は、220棟検出されているが、6間×3間の規模を持つ建物の検出は初めてである。この建物からは、極少量の土師器片しか出土しなかったが、奈良時代前期の竪穴住居S B6098との埋土の切り合いにより竪穴住居より古いことを確認した。

掘立柱建物S B6091は、4間×2間の東西棟である。S B6090とほぼ同位置で検出したので、立て替えかと考えたが、埋土の切り合い関係がはっきりしなかったことと、出土した遺物が少量であったため不明である。しかし、柱掘形の埋土が同じで、しかも柱通りの方向が同じ向きを示すので、それほど時期差はないと思われる。

掘立柱建物S B6135は、北調査区の東部で検出した4間×2間の南北棟である。柱通りは、

N13°Wで、S B6090・6091と棟方向が直行する建物である。柱掘形は、一辺0.5m、深さ0.5mである。埋土の切り合い関係によりS B6135→S B6105と確認できた。

掘立柱建物S B6143は、南北方向に4間分検出したが、規模は調査区外のため不明である。

土坑S K6107・6110は、調査区の北調査区の中央に位置する。

S K6107は、長径2.9m、短径1.6m、深さ0.3mの不整楕円形を呈す。北辺を室町時代前期の溝S D6108に削平される。遺物は、土師器杯・皿・甕等が整理箱に約1箱出土した。

竪穴住居S B6098・6099・6100は、北調査区北部中央に位置する。埋土の切り合い関係によりS B6090→S B6098→S K6171である。S B6098・6099はともに長軸方向はE 7°Sである。

		遺 構 の 種 別			
		S B	S K	S D	S E
奈良時代	前期	6090・6091・6098	6107・6110・6113・6117		
		6099・6105・6121	6118・6128・6129・6133		
		6125・6130・6135	6171		
6143・6146・6168 161					
	中期	6123・6124	6137		
	不明	6092・6109・6112			
		6116・6144・6158 6201			
平安時代	後Ⅱ期	6131・6155・6157 6159・6160	6132		
	末期	6106・6111・6150	6103・6161・6163・6164 6175・6192		
鎌倉時代	前期	6170・6174	6115・6140・6149・6172 6173・6176・6177・164		6189 6190
		6119・6120	6093・6104・6122・6126 6148・6182・6197		
	後期	6134・6162・6165	6094・6114・6136・6138	207	
		6180・6185・6186 6187	6151・6169・6181・6200 162		
不明		6127・6147・6139・6102	6097・6141・6195	6145	
室町時代			6095・6152・6153・6154 6156・6167・6178・6179 6183・6184・6196・6198 165	6096・6142・6108 6166・6193・6194 6199・6188・206	6101

第3表 第37次調査 時期別遺構分類表



第13回 第87次遺構発掘図 (1:200)



竪穴住居 S B 6098は、規模が4.0m×3.2mで東壁にカマドをもつ。これまでの調査によってこの時期の竪穴住居は、北壁か東壁にカマドがあるのが一般的で、今回もそれにあてはまる。カマドの南半分は S B 6099によって削平される。床面は固くひき締まっていた。遺物は土師器杯・甕等が整理箱にして約1箱出土した。

竪穴住居 S B 6099は、4.0m×3.5mの規模で東壁にカマドがつく。南西隅を室町時代の井戸 S E 6101によって削平されていた。また、カマドのすぐ東側で多量の炭と煙道らしき土坑を検出した。遺物は、カマド付近で土師器甕・杯、須恵器杯等を整理箱で約1箱分が出土した。

竪穴住居 S B 6100は、隅丸方形で2.9m×2.6mの規模である。今回確認した竪穴住居の中では一番小形である。カマドは北壁で検出され、中央部から底部を欠く土師器甕が逆さまの状態出土した。支柱石の代用と考えられる。竪穴住居の長軸方向はN14°Eですぐ西側で確認した S B 6098・6099のカマド位置とは異なる。遺物は、土師器杯・甕等を整理箱にして約1箱出土した。S B 6121・6130は、北調査区中央部北端に位置する。S B 6121は、奈良時代前期の土坑 S K 6118によって北西コーナーを削平される。カマドは北壁の中央で検出した。そのカマドの内部から焼土に混じって甕片が出土したが、明確なカマドの形状は確認できなかった。住居の規模は3.1m×2.8mで隅丸方形を呈す。

竪穴住居 S B 6130は、5.1m×3.9mで、今回確認した竪穴住居の中では最大級のものである。カマドは北壁で検出し、カマドの内部から4個体の甕が焼土と粘土に混じって出土した。この S B 6130は平安時代後Ⅱ期の土坑 S K 6132によって削平されていたが、床面まで掘り下げた段階で北東隅コーナーを確認することができた。周溝及び柱穴は確認できなかった。

竪穴住居 S B 161・6105・6125は、北調査区北東部中央に位置する。

竪穴住居 S B 161は、第8-4次トレンチ調査によって平安時代の土坑とされていたが、今回の調査によって奈良時代前期の竪穴住居に修正した。規模は3.3m×3.3m。東側で S B 6105と切り合い、新旧関係は S B 161→S B 6105である。カマドは東壁で確認した。土師器甕が焚口付近の壁面に張り付いており、カマドの壁の補強材として使用されたと思われる。

竪穴住居 S B 6105は、東壁と南壁を鎌倉時代の土坑群によって削平されていたが、カマドの跡は、辛うじてそれらの土坑群から破壊を免れ、東壁で検出した。遺物はカマド付近から多く出土しており、土師器杯・いなか風輪・台付皿・長胴甕等が整理箱にして約2箱出土した。

竪穴住居 S B 6125は、北側を東西に走る室町時代の溝 S D 6108と鎌倉時代中期の土坑 S K 6126によって削平される。規模は4.3m×4.0mで隅丸方形を呈す。カマドは北壁で検出され、その両脇で貯蔵穴らしきものを検出した。遺物は、ほとんどがカマド付近からの出土によるもので、土師器杯・いなか風輪・皿・長胴甕、須恵器杯・蓋等が整理箱にして約2箱出土した。

竪穴住居 S B 6168は、南調査区北部中央で、S B 6146は、南調査区南西隅で検出されたが、西

方とも新しい遺構に破壊され、調査区外へ延びるため規模は不明である。

土坑SK6110は、長径2.7m、短径2.6m、深さ0.4mの隅丸方形を呈す。中央部を室町時代前期の溝SD6108に削平される。規模から考えて、当初、竪穴住居かと考えたが、カマドを確認できなかったことと、床面積が小さいことも考え合わせて土坑と判断した。遺物は土師器杯・いなか風椀・甕、須恵器杯等が整理箱にして約2箱出土した。

土坑SK6117・6118は、北調査区の南方に位置する。埋土の切り合い関係によりSK6117→SK6118である。

SK6117は、長径4.4m、短径3.4m、深さ0.1mの浅くて大きな土坑で円形を呈す。西側部分を鎌倉時代の溝SD6097と室町時代の溝SD6096によって削平される。遺物は、土師器杯・甕・土鍾が、上面の包含層で常滑産の壺、山茶碗等が出土している。

SK6118は、SK6117と折り重なるように検出された土坑で、長径4.4m、短径4.2m、深さ0.1mの規模である。遺物は、土師器杯・甕片等が出土した。

土坑SK6128・6129・6133は北調査区南方中央に位置する。SK6128は、長径2.9m、短径1.6m、深さ0.3m。SK6129は、長径4.0m、短径2.2m、深さ0.3mである。SK6128は、南半分がSB6130と重複し、埋土の切り合いよりSK6128→SB6130の順を確認した。埋土は黒褐色土で、遺物は土師器杯・皿・甕等が整理箱に約1箱出土した。

SK6133は、長径3.2m、短径1.8m、深さ0.2mで、西側部分を平安時代末期の土坑SK6132に削平される。北側部分は一段深くなっている。

(2) 奈良時代中期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物2、土坑1がある。

掘立柱建物SB6123・6124は、北調査区南部中央に位置する。SB6123は、南北棟であるが、南側の約3分の1が調査区の畦の下のため、桁行4間以上、梁行2間を確認するにとどまった。竪穴住居SB6130とは埋土の切り合いによりSB6130→SB6123である。

SB6124は、3間×2間の東西棟で、桁行8.0m、梁行4.0mの規模をもつ。柱掘形は、一辺0.3m、深さ0.3mである。

土坑SK6137は、北調査区西部中央に位置し、竪穴住居SB6105内で検出した。規模は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.4m。奈良時代前期の掘立柱建物SB6135との埋土の切り合い関係によりSB6135→SK6137である。遺物は少量の土師器片を出土した。

(3) その他の奈良時代の遺構

奈良時代で時期細分できなかったものに掘立柱建物SB6092・6109・6112・6116・6158・6201、竪穴住居SB6144がある。

SB6092は、北調査区北部西方で、SB6201は、東方で、SB6109・6112・6116は、北調査

区東端で、S B6158は、南調査区中央付近に、東端にS B6144が位置する。

S B6092は、桁行、梁行4.3m×4.0mの総柱建物で、埋土の切り合いから竪穴住居S B6098よりは新しいと考えられる。

S B6109・6112は、ともに南北4間分を検出したのみで規模は調査区外のため不明である。

S B6116は、大型の南北棟で、梁行は3間と確認したが、桁行は調査区外のため規模は不明。

S B6158は、南調査区で唯一の奈良時代の掘立柱建物で5間×2間の東西棟である。柱通りはE11°Sで柱掘形一辺0.6m、深さは0.3mである。

S B6201は、北半分が調査区外のため規模は不明。

S B6144は、西側半分が、調査区外のため規模は不明である。

(4) 平安時代後Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物S B6131・6155・6157・6159・6160がある。

S B6131は、北調査区南部中央に位置する。このS B6131は、南東隅に土坑を持つ4間×3間の東西棟である。柱穴内には、こぶし大の偏平な川原石が見られた。柱掘形は、一辺0.4mで、深さは、0.1～0.3mとばらつきがみられた。これまでの調査で、計10棟の南東隅に土坑をもつ掘立柱建物を確認しているが、平安時代後Ⅱ期のものは初めてで、最も古い例である。

S B6155・6157・6159・6160は、南調査区北部西方にまとまって位置する。4棟とも柱掘形の切り合い関係がないために、同時期での前後関係は不明である。

S B6155は、4間×2間の東西棟である。柱通りはE14°Sを示す。この調査区のすぐ南側を走る鎌倉時代の古道は、東に対して約13°～14°南に傾いているので、道路の向きを意識して建てたと考えられる。

S B6157は、西側半分の柱列を室町時代の溝S D6142によって削平されているので規模は不明である。

S B6159は、3間×2間の南北棟、S B6160は、3間×2間の東西棟である。桁行、梁行は、S B6159が、6.3m×4.4m、S B6160が、6.0m×4.1mである。柱通りの方向は、S B6159が、N13°E、S B6160がE12°Sで、この両棟は、道路を意識して建てたと考えられる。

(5) 平安時代末期の遺構

この時期の遺構として掘立柱建物3、土坑7がある。

掘立柱建物S B6106は、北調査区のはほぼ中央で検出された3間×2間の東西棟である。西側妻柱は、鎌倉時代後期の土坑S K6126によって削平されていて検出することは出来なかった。柱掘形は、一辺0.4～0.5m、深さ0.3m。柱通りはE7°S。掘立柱建物S B6131と埋土の切り合い関係によりS B6131→S B6106である。

掘立柱建物S B6150は、南調査区北西方向で検出された4間×2間の東西棟である。鎌倉時

代前期の土坑SK6149と埋土の切り合い関係により、SK6149→SB6150と確認できた。

土坑SK6103は、北調査区北部中央で検出され、規模は、長径1.6m、短径1.2m、深さ0.3m。埋土は暗褐色土である。遺物は、土師器杯、山茶碗・山皿等が整理箱にして約1箱出土した。

土坑SK6132は、掘立柱建物SB6132に伴う南東隅土坑である。掘形は、逆台形状を呈し、規模は長径3.8m、短径1.8m、深さ0.3mである。この土坑はSD6132の2間×1間の東柱内におさまる。遺物は土師器皿・鍋・高杯、山茶碗が出土した。

土坑SK6161・6163・6164は、南調査区北部西方に位置する。

SK6161は、長径4.4m、短径2.2m、深さ0.3mで、楕円形を呈す。遺物は土師器杯・皿・鍋、山皿等が整理箱にして約1箱出土した。

SK6163は、長径3.9m、短径2.4m、深さ0.2mの比較的大きな土坑である。形状は、隅丸方形を呈し、掘形は逆台形状である。掘立柱建物SB6158、6159との埋土の切り合い関係によりSB6158→SB6159→SK6163である。遺物は、土師器鍋・小皿・甕、山茶碗・山皿等が整理箱にして約1箱出土した。

SK6164は、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.3mの規模の小型の土坑である。遺物は、土師器甕片、山茶碗片が出土している。

土坑SK6175は、南調査区のほぼ中央に位置し、長径1.8m、短径1.2mの土坑で埋土は灰褐色土である。この土坑の中央部で、埋土の切り合い関係により鎌倉時代前期の掘立柱建物SB6174の柱穴を確認できた。遺物は、土師器杯・皿・甕・鍋、山茶碗が出土した。

土坑SK6192は、南調査区東部中央に位置する。規模は長径3.6m、短径2.2m、深さ0.1mの浅くて大きい楕円形の土坑である。遺物は、土師器杯・甕・鍋・高杯、山茶碗が出土している。

(6) 鎌倉時代前期の遺構

この時期の遺構は、掘立柱建物2、土坑8、井戸2がある。

掘立柱建物SB6170・6174は南調査区北部中央に位置する。SB6170は、身舎が3間×2間の四面廂の建物で、鎌倉時代前期の四面廂は、今回の検出例が初例である。柱掘形内には、偏平な川原石を伴う。このSB6170とはほぼ同じ位置でSB6174を検出した。埋土の切り合いからSB6170→SB6174である。SB6170の建て替えと考えられる。規模は4間×4間で、SB6170と同じように柱穴内に偏平な川原石を伴う。

土坑SK6140・6149は南調査区北部西方に位置する。

SK6140は長径3.2m、短径0.2～0.5mの不整形楕円形を呈する。検出時には、一つの土坑と考えていたが、底まで掘り下げると二つの土坑であった。同時期に重複して掘られたものであろう。この土坑からは、遺構検出の段階から土器が多量に出土している。土師器杯・鍋・甕・羽釜、山茶碗・山皿、白磁等が整理箱にして13箱出土した。

S K6149は、長径3.4m、短径2.9mで、隅丸方形を呈す。遺物は、土師器杯・壺・鍋・羽釜、山茶碗が整理箱にして約1箱出土した。

土坑S K6172・6173・6176・6177は、南調査区東部中央に位置する。

S K6172は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3m、S K6176は長径1.8m、短径1.2m、深さ0.2m、S K6177は、長径1.4m、短径1.0m、深さ0.1mである。遺物は、S K6172が、土師器杯・皿を、S K6176・6177が土師器杯・皿、山茶碗を出土している。

北調査区南部東方に位置するS K164は、昭和49年度の第8-4次トレンチ調査で、確認されていた土坑である。今回の調査によって長径5.6m、短径3.9m、深さ0.3mの規模であることが判明した。出土した遺物は、土師器杯・皿・高杯・鉢・羽釜、山茶碗・山皿、水注、磁石、青磁、白磁が整理箱にして約2箱出土した。

井戸S E6189・6190は、南調査区南端中央に位置し、S E6189が長径1.1m×1.0mの円形を呈し、S E6190は長径2.0m×短径1.6mの楕円形を呈する。S E6189・6190はともに1.0m掘り下げた所で、出土する遺物量も少なかったことと、安全性を考慮して未完掘のままである。

(7) 鎌倉時代中期の遺構

この時期の遺構は、掘立柱建物2、土坑7がある。

掘立柱建物S B6119、6120は南調査区南端に位置する。ともに柱穴内に扁平な川原石を伴う総柱建物である。

S B6119は、桁行8.1m、梁行5.8mの東西棟で柱掘形も一辺0.4m前後、深さ0.2mと小さい。桁行柱間には少しばらつきがある。

S B6120は、南東隅土坑S K6122を伴う桁行6.3m、梁行4.7mの3間×3間の東西棟建物である。これまで確認された南東隅に土坑を伴うもので最大級のものは、昭和62年度の第68次調査のS B4430である。規模は6間×6間、桁行、梁行12.6m×10.7mである。単純に今回確認したS B6120とS B4430の床面積を比較すると前者が29.6㎡、後者が135㎡である。

S K6093は、北調査区北部西方で確認された。遺物は、少量の土師器杯・鍋片を出土した。

S K6104は、北調査区東方に位置し、長径2.2m×短径1.0m、深さ0.1mで隅丸方形を呈し、南部を室町時代の溝S D6108に削平される。

S K6126は、奈良時代前期の整穴住居S B6125と切り合う不整楕円形の土坑で、長径1.5m、短径1.4m、深さ0.3mである。遺物は、土師器杯・壺・鍋、渥美産壺、山茶碗が出土した。

S K6148は、南調査区北西部に位置し、鎌倉時代前期の土坑S K6149と切り合うL字形の土坑である。規模は、長径1.6m、短径0.6m、深さ0.2mである。

S K6182は、南調査区中央部南端に位置し、長径2.6m、短径2.2mの隅丸方形の土坑で少量の土師器片を出土した。

S K 6197は、南調査区西方に位置し、長径2.6m、短径2.4m、深さ0.2mの隅丸方形の土坑で少量の土師器片を出土した。

(8) 鎌倉時代後期の遺構

この時期の遺構に掘立柱建物7、土坑8、溝1がある。

掘立柱建物S B 6180・6185・6186・6187は、南調査区中央部東方に、まとまって位置する。

S B 6180は、3間×3間の総柱の建物である。柱穴内部に偏平な川原石を伴う。大きさを床面積で表現すると29.6㎡、約9坪で、これまで斎宮跡で確認された鎌倉時代の総柱建物の床面積の平均値が約40㎡であるので、少し規模の小さい建物といえる。前述以外の総柱建物の床面積は、平安時代後Ⅱ期のS B 6131が52㎡、鎌倉中期のS B 6119が47㎡、S B 6120が29㎡である。

S B 6185は、4間×2間の東西棟、S B 6186・6187は、共に3間×2間の南北棟である。3棟とも柱掘形が径0.3m前後と小さい。

S B 6165は、南調査区南西部に位置する南東隅に土坑を伴う5間×5間の総柱建物である。柱穴内に偏平な楕円形の川原石を伴う。前述の床面積で大きさを表現すると71㎡で、今回の確認した総柱建物の中では一番大きい。なお、この建物に伴うS K 6181からは多量の焼土、炭、スラグ、釘、砥石が出土しており、工房を伴う建物であった可能性も考えられる。

土坑にはS K 6094・6114・6136・6138・6151・6169・6181・6200・162がある。なかでも第8-4次調査で確認されていたS K 162は、今回の調査によって規模が長径5.8m、短径5.2m、深さ0.1mの大きさであることを確認した。遺物は土師器杯・鍋・甕、須恵器蓋（混入遺物）を出土した。

溝S D 207は南北調査区の西端部を南北に走る大溝である。S D 207は昭和49年度第8-5次調査で確認されている幅約1.5m、深さは現地表面から北で2.0m、南で1.5mもある非常に大きな溝である。今回の調査によって古道に付随する溝が調査区の南東隅で北上し、更に北調査区の北東隅で東へ曲がることを確認した。塚山と上園の字界でもある現況の道とほぼ同じコースをたどると考えられる。遺物は、整理箱にして土師器杯・鍋・高杯、常滑産壺、山茶碗が約2箱出土した。

(9) その他の鎌倉時代の遺構

鎌倉時代で時期細分できなかったものに土坑4、溝3、井戸1がある。

土坑S K 6102・6127・6139は北調査区で、S K 6147は南調査区で確認された土坑で、いずれも土師器片、山茶碗片を少量出土したのみである。

溝S D 6097・6141は北調査区に位置する。

S D 6097は、北調査区北西部から南下する幅0.6m、深さ0.1～0.2mの比較的浅い溝である。

S D 6141は、北調査区の南端を走る溝である。ほとんどの部分が南北調査区の畦の下である

が、おそらくS D6097の続きと考えられる。

S D6195は、南調査区の南端部東方でS E6190に接続する形で検出した。幅0.6m、深さ0.1mである。いずれの溝も少量の土師器片を出土したのみであるので、時期判定の材料を欠く。

S E6145は、南調査区南端で確認した直径1mの小型の井戸で、少量の土師器片を出土するにとどまった。

(10) 室町時代の遺構

この時期の遺構に土坑13、溝10、井戸1がある。

北調査区にS K6095、南調査区の中部西方にS K6152・6153・6154・6156が、中部南方にS K6167・6178・6179・6181・6183・6184が、東方にS K6196・6198・165がある。

なかでも、S K6167は、長さ3.8m、短径2.8m、深さ0.5mと比較的大きな土坑で、室町前期のものである。出土した遺物は、土師器杯・鍋・羽釜、山茶碗、白磁などが整理箱にして約1箱出土した。

溝はS D6096・6108・6142・6166・6188・6191・6193・6194・6199・206を確認した。

なかでも、第8-5次調査（昭和49年度）で確認されていたS D206は、幅0.6m、深さ0.1mで、総延長約160mを測る。この溝は屋敷地を周回してめぐる溝と考えられるが、時期決定の基準となる土器が出土しなかったため不明とした。

井戸S E6101は、遺構検出の段階では、竪穴住居S B6099と切り合う室町時代の土坑と考えていたが、1m位掘り下げたところで、井戸であることを確認した。

(11) 遺物

今回出土した遺物の時期は、遺構の時期と対応して奈良時代～室町時代と多期にわたるが、遺物の量から見れば奈良時代と鎌倉時代に集中する。

(1～12)は、奈良時代前期の竪穴住居S B6125から出土したものである。

(1)は、いなか風碗で口径11cm、器高4.4cm、体部外面に粘土巻き上げ痕をのこす。杯(3)、(4)は、口縁端部をヨコナデをし、底部をヘラズリするb手法のものである。(3)は体部内面に放射状暗文を施し、(4)にはハリツケ高台がつく。壺(7～10)はカマド内部から折り重なって出土した。(7・8)は体部が長い長胴壺、(9・10)は体部が球形になる小型の壺である。それぞれ体部外面を細かいタテハケメ調整、体部内面をヨコハケメ調整、内面下半をヘラズリ調整する。

(11～12)は同じくカマド内部から出土した須恵器杯及び蓋である。(11)は口径12.8cm、器高4.4cm、(12)は口径14.6cm、器高4.4cmで、ともに色調は青灰色である。

(13～19)は奈良時代前期の竪穴住居S B6098から出土したものである。

(13)、(14)はカマド内部から、他は床面上面から出土した。(15)は口径15.4cm、器高3.0cmで、ロクロ水挽き技法による。外面底部には回転糸切り痕を残す。壺(16～19)は、何れも体部外面

に細かいタテハケを施し、内面には横方向にヘラケズリをするものとヨコハケをするもの二種類ある。口縁端部はいずれもくの字状となる。

(21~28)は奈良時代前期の竪穴住居S B6105からの出土である。(21~28)はすべて床面上面でも出土した。(21・22)は体部内面に放射状暗文と螺旋状暗文を施す土師器杯で共にb手法によるものである。土師器皿については、内面に放射状暗文を施す(23・24)と施さない(25・26)がある。甕については、体部が長い長胴甕(28)と底部が球状となる小型の甕(27)が出土した。小型甕(27)は口径13.4cm、器高10.7cmで体部外面上半をタテハケ調整、下部をヘラケズリをした後ハケメ調整をする。体部内面は上部をヨコハケ調整をし、下部にヘラケズリを施す。

S B6130からは土師器杯(29・31)、皿(32~34)、いなか風碗(30)、甕(36~38)が出土した。すべて奈良時代前期の中におさまる土器と思われる。

奈良時代前期の土坑S K6110からは、斎宮標式遺構SK3000に相当する須恵器杯(41)、蓋(42)が出土した。須恵器杯(41)は口径17.2cm、器高3.6cmでロクロ水挽き手法によるもので、体部外面には乳灰色の自然釉がみとめられる。須恵器蓋(42)は口径17.6cm、器高3.8cm、技法はロクロ水挽きによるもので、天井部外面をロクロ回転ヘラケズリ、天井部内面をナデている。土師器蓋(43)は覆宝珠形つまみを3分の2ほど欠損するが、天井部内外面にきれいなヘラミガキを施す。

平安時代の遺物に関しては、平安時代後Ⅱ期と平安時代末期に限られる。

なかでも、平安時代末期の土坑S K6163からは一括資料とまでいなくても、良好な資料が得られた。斎宮標式遺構でいえば第50次調査S D3052に担当する。

土師器杯(46・47)は非ロクロ製の土師器である。この時期の特徴である口縁端部のみをヨコナデをして、その下端部を肥厚させる手法が見られる。(46)が口径15cm、器高3.1cm、(47)が口径15cm、器高2.8cmで共に色調は淡茶褐色である。(48~52)は土師器小皿で、(48~50)は非ロクロ製、(51・52)はロクロ製土師器である。山茶碗は小型の(53)と口径が16.8cmもある大型の(54)が出土した。

鎌倉時代の遺物に関しては、前期のS K6140出土土器があげられる。土坑の規模のわりには比較的多くの土師器、山茶碗が出土した。

土師器杯(55~64)は口径13cm前後、器高3cm前後、器壁6mm前後とほぼ法量が一致する。土師器皿(65~71)に関しても鎌倉時代前期の特徴(口縁端部が内湾気味に立ち上がり、端部が肥厚する)が窮える。土師器鍋としては(72・74)が残りの良いものとしてあげられる。(74)は口縁端部を内湾気味におさえて折り曲げ、口縁はヨコナデをする。体部外面は部分的に細かくて浅いハケメが残り、内面には1cmに8~10本ほどの横方向にハケメがみられる。外面底部にはすしが付着する。鍋(72)は(74)よりひとまわり小振り、体部内面だけを横方向にヘラケズ

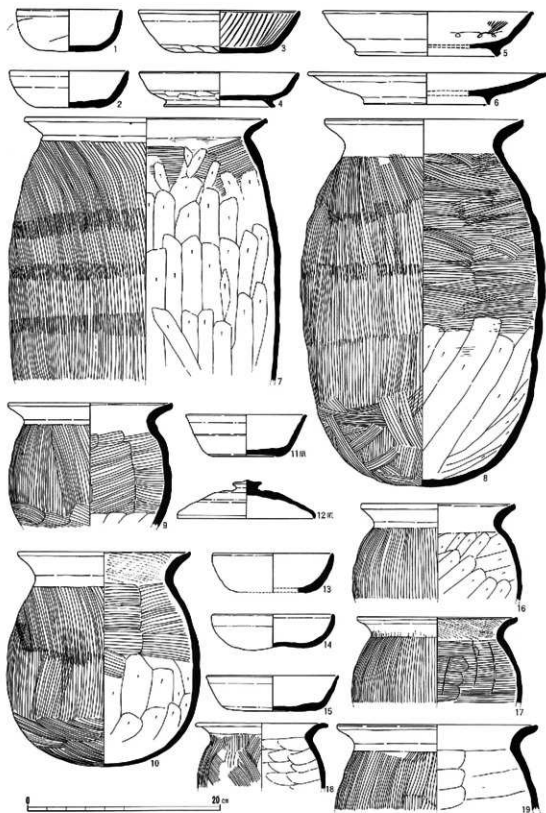
りを行っている。山茶碗(76~79)は口径16cm前後、器高は4.0~5.0cm前後である。いずれもヨコナデにより口縁端部は丸みを帯びている。底部に関しては、糸切り未調整のもの(76~78)、底部を糸切りをした後、高台をはりつけ、糸切り痕をナデ消すもの(76)とがある。藤澤氏による瀬戸窯山茶碗編年のⅢ-5~Ⅲ-6に比定できそうである。なお、(78)には体部外面下方に曇痕らしきものがみられた。

(79・80)は鎌倉前期の土坑SK6149から出土した大型の羽釜と鍋である。(79)は口径36cm、器高31.7cm、と今回の出土遺物の中では最大級のものである。口縁端部は上端部で内側に向かって面をつくり、上端部を指先でおさえてナデしているために口縁上端内面に沈線ができる。鍋の形状も上方向につまみ上げてナデしているため上向きかげんである。体部外面に細かいハケメ、体部外面下部にヘラケズリがみられる。(80)は、いわゆる伊勢型鍋と呼ばれるものである。底部は欠損しているため器高は不明だが、口径は36.6cmと大きい。体部外面下方ですすの付着がみられた。

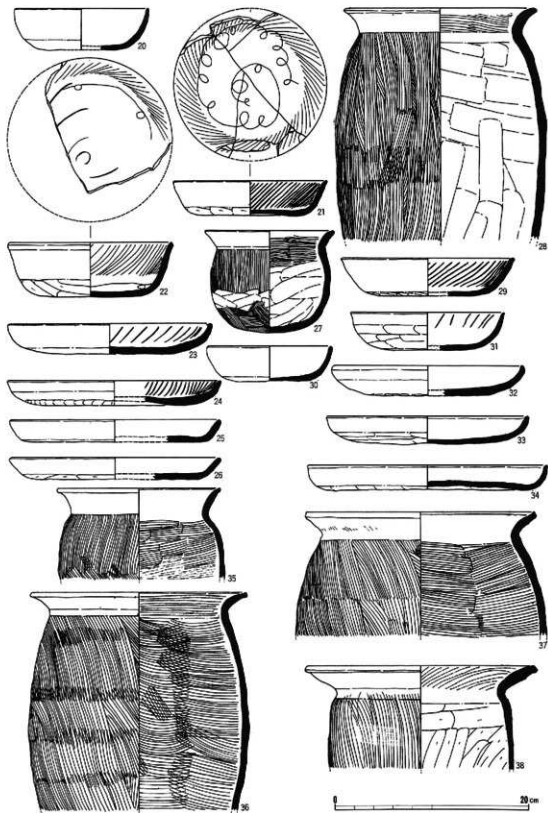
特殊遺物は緑釉陶器片12、墨書土器9、瓦片3、ミニチュア土器3、青磁片45、白磁片16、土錘3、石硯1、陶硯1、製塩土器片1、石鍋2、鉄斧1、釘20等が整理箱にして7箱出土した。墨書土器(81・82)は「武」、「大」と読める。陶硯(83)は体部を約2分の1欠損する。硯面にはヘラケズリの痕、底面にはナデとオサエ、側面にはヘラケズリがみられる。胎土は非常に緻密で、色調は灰白色である。石硯(84)は黒色粘板岩製で下半部を欠損する。上端の淵より一段低くなっており欠損後、再加工した痕跡がある。砥石(85~91)はすべて葦灰岩製で目の粗い物、密なものがある。砥石の使用面は、ほとんどが裏表面であるが、なかには側面も使用したものが存在する。ミニチュア土器には室町時代前期の土坑SK6167から出土した(92)と室町時代前期の土坑SK165の上面で出土した(93)がある。(92)は土師器鍋のミニチュアで、口径8.0cm、器幅3.3cmである。口縁端部をヨコナデをし、体部外面に指オサエを施す。(93)は須恵器合子と考えられるが確証はない。口径5.6cm、現存高は1.6cmである。(94)は鎌倉時代前期の土坑SK164から出土した須恵器水滴である。美濃系の須恵器と考えられる。他、今回の調査では青磁、白磁片が多く出土しているが、青磁に関しては龍泉窯系の小碗、杯片が多くみられた。

(12) まとめ

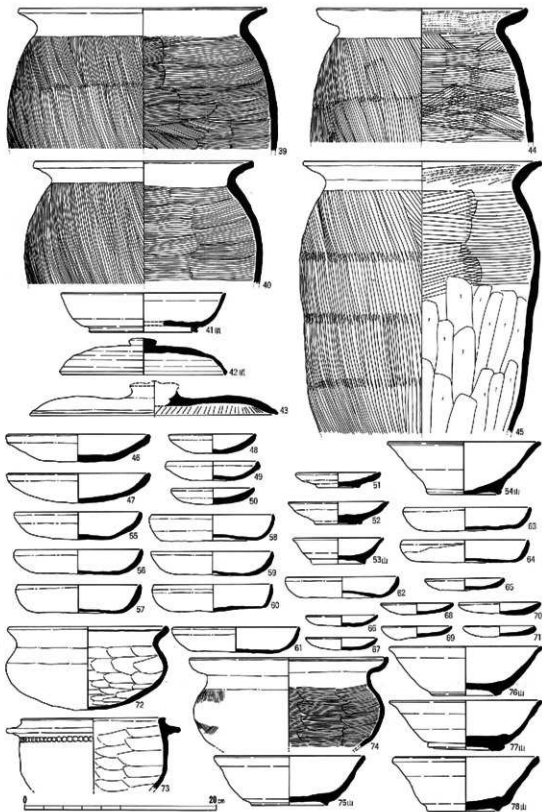
今回の調査によって、従来から古道沿いには奈良時代及び鎌倉時代の遺構が多いとされていたことをより補強する結果となった。特に古道沿いに走る鎌倉時代後期の溝SKD207が東方に広がる中町地区の釜蓋目状の方形地割りを意識するように、西から東へ進んできた溝が今回の調査区の南東隅あたりで現況の地割りである現道に沿って北上し、更に現道に沿って緩やかに東へ曲がっていくことを確認できたことは大きな成果である。中町地区に存在していた斎宮寮



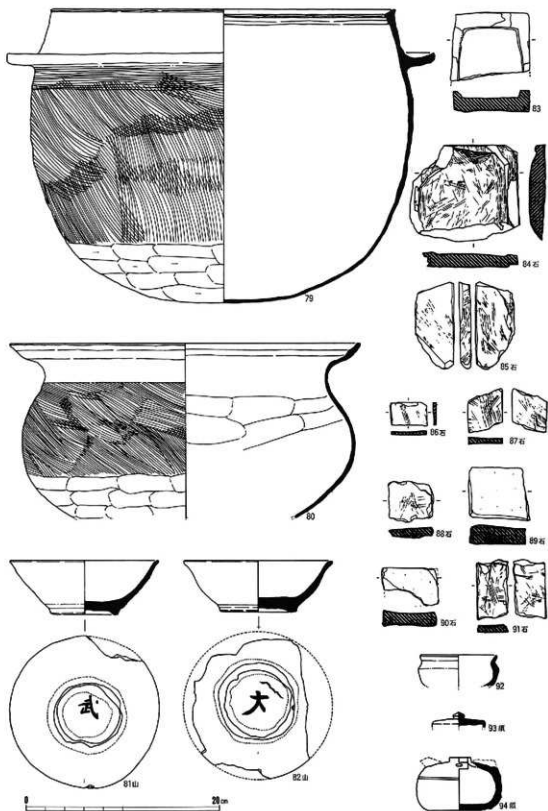
第14図 第87次出土遺物 S B6125 ; 1~12、S B6098 ; 13~19



第15図 第87次出土遺物 S B 6105 ; 20~28、S B 6130 ; 29~38



第16図 第87次出土遺物 S B 6110 ; 39~44、S B 161 ; 45
S K 6163 ; 46~54、S K 6140 ; 55~78



第17圖 第87次出土遺物 S K 6149 ; 79 · 80、包含層 ; 81 ~ 85 · 88 ~ 91
 S D 206 ; 86、S K 164 ; 87 ~ 94、S K 6167 ; 92
 S K 165 ; 93

がこれまでの調査によって平安末期ぐらいには中樞部でなくなることが明らかになりつつあるが、にもかかわらず鎌倉時代後期の溝SD207は、基盤目状の方形地割りの手前で、あたかもそれを意識するかのように曲げられている。つまり、鎌倉時代においても史跡東部が齋宮寮の中樞部であったという意識が働いていたためだと考えられる。

今回の調査で検出した奈良時代前期でも古いほうに比定できる大型の掘立柱建物SB6090は、中町地区で検出されている大型の掘立柱建物群と比べても、柱掘形こそ小さいが、規模だけをみれば遜色のないものである。現在まで奈良時代の掘立柱建物は総計220棟検出しているが、そのほとんどが3間×2間(26.8%)、もしくは3間×3間(11.8%)であることを考えてみても今回確認された6間×3間の掘立柱建物SB6090の発見の意義は大きい。このことは、塚山地区の存在する史跡西部における奈良時代前半の齋宮跡の究明に明るい材料を得たと思われる。

それと今回の調査で注目したいのは、鎌倉時代の総柱建物群とそれらを取り囲む溝の検出である。いわゆる屋敷地遺構である。今回のような屋敷地の遺構の例は亀山市大藪遺跡・正知浦遺跡、玉城町榎ノ木遺跡・蚊山遺跡、白山町家野遺跡など、最近県下各地で確認され、中世村落の実体が明らかになりつつある。屋敷地を有する造営主体者がいかなる階層に属する者であるのか、その解明は今後の課題であるが、齋宮においてもこの種の遺構が検出されたという事実は、確実に荒廃期に向かっていた齋宮寮の一端をよく反映したものと理解されよう。しかし史跡東部の基盤目状区画の中では、未だ1棟も中世の民家風建物は検出されておらず、この時期になっても依然として神聖化された場所という意識が強く働いていたものと考えられる。

IV 第88次調査

6 AGN-C・D (鍛冶山地区)

史跡東部に溝や道路によって区画された一辺120m四方の基盤目状区画が存在することが提唱されて以来約10年が経過したが、調査次数を重ねるたびに、その実体がより明確なものとなってきている。今回の調査地はその中の北から3列目、東から2列目の区画の中の北西部分に当たり、約1,250㎡の調査を実施した。

当調査区の北側では、昭和57年度に第46次調査^②が実施され、東西方向の区画溝SD2400、横列SA2800、大型掘形をもつ倉庫SB2780・SB2810などが確認されているほか、すぐ西隣りで実施した第21-1次調査^③でも、小規模な現状変更に伴う調査ではあったが、奈良時代中期の土器の標式遺構となっている土坑SK1098が検出されているなど、従来から重要な区画の一つであると考えられていた。

今回の調査の主要な目的は、横列SA2800の南への延長部分とこれに取り付くであろう門跡の存在を確認すること。さらに横列に囲まれた区画内での建物や大型倉庫に付随する他の関連建物群などを明らかにすることであった。

遺構面までの基本的な層序は、耕土→灰褐色土→地山の順で表土下30cmで地山に達した。なお調査区西端では、中世以降の攪乱を受けているため、灰褐色土下に明茶褐色土が厚く堆積している状況が認められた。遺構面の絶対高は北で9.1m、南で9.2mを測り、ほぼ平坦である。

(1) 奈良時代前期の遺構

調査区の中央部を西北西方向から東南東方向に走る溝SD2404とこの溝の南を並走する溝SD6252がある。

SD2404は、幅0.9m～1.3mを測り、部分的に深く掘られる場所があるが、平均して深さ20cmほどである。溝方向はE15°Sでははまっすぐに走る。溝底の絶対高は西で9.0m、東で8.8mを測り、排水は西から東へ向かって緩やかに流れたものと思われる。

SD6252は、幅0.7m～0.9mで、深さ10cm前後の浅いもので、部分的にしか確認できなかったものである。

なお詳細は後述することにするが、SD2404は、宮城西部にあたる古里南部地区や塚山地区で確認の溝SD170の延長線上にのる可能性が強く、おそらくSD6252とに挟まれた部分が道路遺構になるものと考えられる。

(2) 奈良時代中期の遺構

掘立柱建物1棟、土坑20がある。

調査区北側で実施した第46次調査で確認の総柱建物S B 2780は、今回の調査で4間×3間の東西棟建物であることが確定した。柱掘形内の出土遺物は土師器製の細片ばかりで時期決定が難しいが、奈良時代末期～平安時代初期に位置付けられているS A 2800の柱掘形がこの建物の柱掘形を切っており、この時期より以前であることは確実である。また周辺に奈良時代中期の土坑群が多数検出されているにもかかわらず、この時期の建物が1棟も確認されていないというのも不自然である。以上のような点を踏まえ、確たる証拠はないものの、最も規模の大きいS B 2780を当地区における初源的な建物と考え、一応この時期に属する建物と考えた。

土坑の多くは、調査区西部と調査区北辺中央やや東寄りに集中している。土坑の規模は大小様々で、小さなものは径1.2mから大きなもので4.0mほどを測り、概ね不整形を呈するものである。

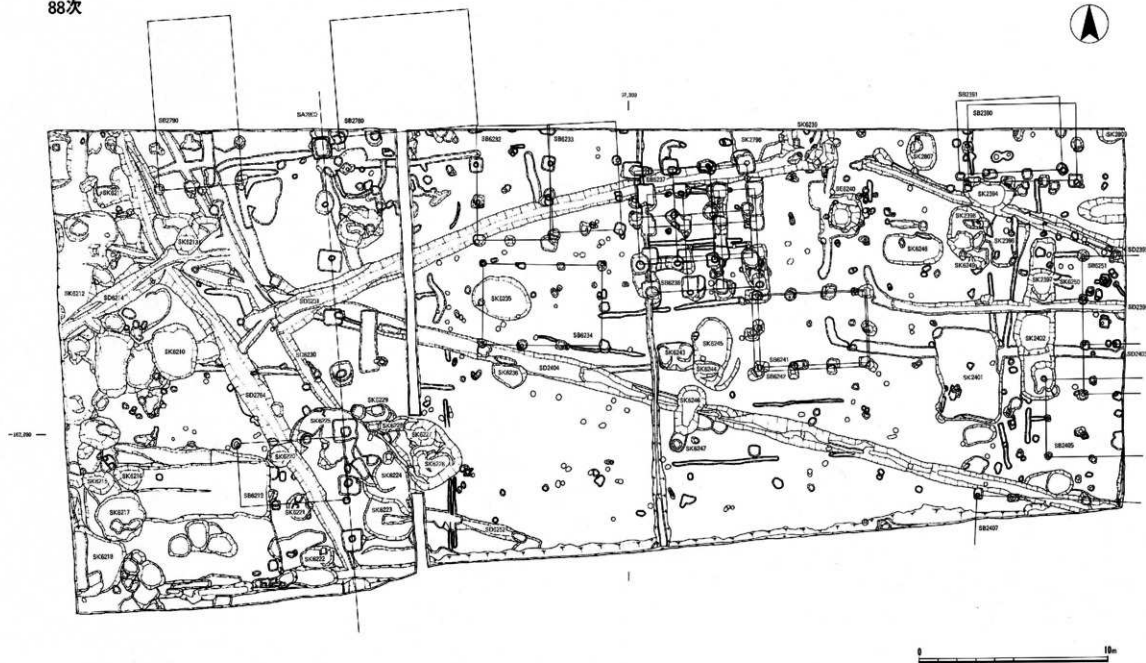
調査区北西部のS K 6211・S K 6213はいずれも小規模な土坑で、遺物は少量出土したにとどまる。またS K 6212は大半が中世以降の擾乱を受け、その形状を十分とどめていないが、底近くの埋土、暗褐色土層より須恵器杯蓋、土師器破片が少量出土した。

S K 6210は径2.9m×2.4mの楕円形を呈し、深さは80cmを測る大きな土坑である。焼土や炭化物の混入した土坑埋土下層から、土師器杯・皿・椀・高杯、須恵器杯・蓋・大型浅鉢など多量の食器類が出土した。なお、この土坑の西側に南北に長い土坑が2基認められるが、遺物は

		遺 構 の 種 別				
		S B	S K	S D	S E	
奈良時代	前期			2404・6252		
	中期	2780	2798・6210・6211・6212 6213・6215・6216・6217 6218・6220・6221・6222 6223・6224・6225・6226 6227・6228・6229・6239			
		後期	6237・6238	2394・2396・2401		
		平安時代	初期	2391・2780・2790	6235・6236・6243・6244	
6232・6233・6234 6241・6242・2800				6245・6246		
前I期	6251			2397・2402・6247・6248		
前II期	2390		2398・2807・2809	2399・2403	6240	
末期			6250	2395・6214		
鎌倉時代			2784・6231			
不明	2405・2407・6219	6249	6230			

第4表 第88次調査 時期別遺構分類表

88次



第18図 第88次遺構実測図 (1:200)

ほとんど出土しておらず、土器以外の廃棄土坑と思われる。

調査区南西部には、SK6215～SK6218の4つの土坑が集中する。このうちSK6215～SK6217は近世の瓦粘土採掘のため、かろうじて土坑の底部分が残存していたものである。SK6215・SK6218は土師器よりも須恵器の出土の割合が高いことが注目される。

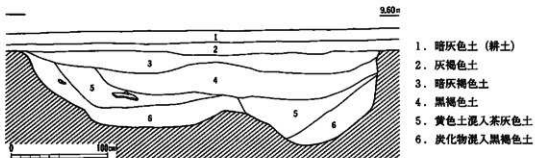
粘土採掘穴の東側は、遺構検出をした段階で、7.5m×8.5mの範囲に明茶褐色土や暗褐色土の広がりがあり、随所に焼土のブロックや炭、黄色砂質土の混入が所が認められるなど、いくつもの土坑群が複雑に切り合う土坑群の集まりであろうと予想された。しかし平面プランでは、明確な切り合い関係を確認するまでには至らず、徐々に埋土を掘り下げながらの調査となった。その結果比較的多くの遺物を含んでいた土坑としてSK6220～SK6229の10基が確認された。

SK6220は、径1.5m×1.2mの土坑ながら深さは1.0mもあり、多くの土師器杯・皿類、須恵器杯類が出土した。埋土上層は遺構面から20cmほどの厚さで焼土混じりの茶褐色土であったが、これより以下では炭化物や灰の混じった灰褐色となっており、出土遺物の大半がこの層から出土した。

SK6225は北壁のみ確認できたもので、復元すると径4m前後の大きな土坑である。深さは30cm～50cmを測り、多器種にわたる土師器、須恵器の食器類や、須恵器甕・鉢などの大型製品が出土した。

SK6225の東にあるSK6226～SK6228は当初1つの土坑として認識されたが、調査の過程で少なくとも3つの土坑に分かれることが判明したものである。このうち断面観察によりSK6226→SK6227の順を確認したほか、SK6228の底のレベルが第19図の4層の底のレベルに近いところから、SK6226・SK6227の埋土を切るSK6228がおそらく最も新しいものとなろう。SK6228出土遺物の中に、他の2つの土坑出土遺物と接合する資料が何例か認められるのはこの証であろう。

SK6226は径2.5m、深さ80cmの不整形土坑。SK6227は1.8m×1.4m、深さ1mの楕円形土坑で、いずれの土坑からも暗文やヘラミガキが多用化された土師器杯・皿類のほか、大型の須



第19図 SK6226・6227土層断面図 (1:40)

恵器製品が多く出土した。

調査区北辺にあるSK2798とSK6239は、その大部分が第46次調査で確認されていたもので、今回その南側への延長部分を確認した。その結果、SK2798は南辺と東辺を鎌倉時代の溝SD6231に切られるものの、一辺4m前後の方形土坑であることが判明した。SK2798からは、土師器杯・皿・碗や大型の鉢・ほぼ完形のカマドが出土したほか、須恵器甕・浅鉢などの大型製品が出土した。なおこの土坑北側に集中している第46次調査で確認のSK2797・SK2808・SK2811・SK2812の出土遺物についても再度見直したところ、SK2798出土遺物と大差ないので、今回奈良時代中期まで遡しておくことにする。

(3) 奈良時代後期の遺構

調査区中央部で掘立柱建物2棟と東部で土坑3を検出した。

重複する2棟の掘立柱建物は、いずれも倉庫と考えられる総柱建物で、切り合い関係よりSB6238→SB6237の順を確認している。

SB6238は3間×3間の東西棟建物で、柱掘形は一辺70cm四方のものから長辺120cmの南北に長いものまで規模・形状は様々である。掘形の深さは、四隅のものが80cm前後、他は40cm～60cmを測る。西から第2列目の柱列を除き、柱掘形2個分を一単位とする南北方向の布掘りが認められた。また南西隅の柱掘形には、南東方向への柱抜き取り穴が確認された。

SB6237は、3間×2間の東西棟建物で、柱掘形は、北側柱列、南側柱列ともに一辺1m前後とSB6238の掘形同様大きなものであるが、中央の柱列はこれより一回り小さい。柱掘形の深さは80～100cmで、柱痕跡もよく残っており、柱の太さは30cm前後のものである。ただ北西隅の柱とこの東側の柱については、柱抜き取り痕が認められ、東の方向に抜き取られたことがわかる。なお北東隅の柱掘形が奈良時代中期の土坑としたSK2798とわずかに切り合うが、調査段階ではこの前後関係について確証が得られなかったものの、柱掘形内出土の土師器カマド片と須恵器甕片が、残存状況の良好であったSK2798出土のものに接合したことから、この土坑よりも新しいことがわかり、またSB6238の南東隅の柱掘形を切るSB6241が平安時代初期の建物として位置付けられるところから、これら2棟の建物を一応奈良時代後期のものと考えておきたい。

これらの建物の東方で検出した土坑SK2394、SK2396、SK2401は既に第41次トレンチ調査で確認されていたものである。なおSK2401は南北4.9m、東西3.5mの方形土坑で、南壁に沿って周溝らしき遺構が認められるところから堅穴住居の可能性もある。

(4) 奈良時代末期～平安時代初期の遺構

掘立柱建物7棟、橋列1、土坑5がある。

橋列SA2800は既に第46次調査で北東隅部分を確認し、東西5間以上、南北5間以上である

ことがわかってきた。今回その南北の延長部分で新たに7間分を検出し、南へ12間(約35.5m)以上延びることがわかった。柱掘形は一辺1.0m～1.4mの方形で、深さ80cm前後である。柱間は2.96mと一定で、横列の造営に際しては当時の一尺=29.6cmの物差しを基準にしたものと考えられる。時期的には、奈良時代中期としたS B 2780やS K 6225の埋土を切っており、これより新しいことは確実であるが、この櫓の造営がどこまで下るのかは、出土遺物からだけでは確証が得られなかった。ただ横列の方向が区画溝の方向であるE 4°Nと一致しており、一応ここでは奈良時代末期～平安時代初期のある時期に造営されたものと理解しておきたい。

S B 2790は、櫓内に囲まれた区画内における唯一の掘立柱建物で、横列内の北東隅に位置する4間×2間の南北棟建物であることが確認された。

その他、横列の外側にある掘立柱建物については、いずれも3間×2間の小規模なものである。

調査区中央にあるS B 6232とS B 6233は南北棟建物で、S B 6232の東側柱通りとS B 6233の西側柱通りが重複し、柱掘形の切り合いからS B 6233→S B 6232の順を確認した。その結果、第46次調査で確認の東西棟建物S B 2795やその東側のS B 2796は存在しないことが判明した。S B 6232の柱掘形は一辺70cmの方形を呈し、桁行・梁行ともS B 6233より一回り大きい。

これらの建物の南にある東西棟建物は、柱掘形が同時期の土坑であるS K 6235の埋土を切っており、これより新しい。

S B 6241とS B 6242は、柱位置をわずかに移動しただけの同一場所における建て替え関係にある東西棟建物で、柱掘形の切り合い関係からS B 6241→S B 6242の順を確認した。いずれの建物も柱掘形は60cm～80cmの隅丸方形を呈する。

調査区北東隅にあるS B 2391は、既に第41次調査、第46次調査で確認済の東西棟建物である。この建物と柱通りの方向が同じで、建物の規模も比較的近い数値を示す建物に前述のS B 6233、S B 6241があり、しかもS B 2381の北側柱通りとS B 6233の北妻柱通りが揃うところから、これらの3棟は同時期に存在していた可能性が強い。そしてこれら3棟の建物に先行する建物として、第46次調査で確認の総柱建物S B 2810があり、3棟の建物より新しい一群の建物として、新しく建て替えられたS B 6232やS B 6242がある。S B 6242の北には、第46次調査で確認のほぼこれと同規模で柱通りを揃えるS B 2805や、S B 2805の東側にもこれと同規模で柱通りを揃えるS B 2389があり、これら4棟が同時期の建物であろう。したがって奈良時代末期から平安時代初期の中で少なくとも3小期の建物群の変遷が考えられる。

土坑は調査区の中央部に集中しており、S K 6235・S K 6236・S K 6243～S K 6246がある。土坑の規模は大小様々で楕円形を呈する。長軸が東西方向を示すものと南北方向を示すものがある。出土遺物は圧倒的に土師器杯・皿類が多いが、土坑の大きさの割には、全体的に出土量

が乏しく破片が多い。切り合い関係が判明しているものにSK6243→SK6245がある。

(5) 平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物Ⅰ棟と土坑4のみである。

SB6251は、大半が調査区東側へ延び、全体の規模は不明であるが、南側に廂をもつ東西棟建物と思われる。

この建物の西妻柱通りと並行する南北に長い土坑SK2397・SK2402は、この建物に関係する遺構であろうか。SK2397・SK2402の規模は、それぞれ3.4m×1.3m、深さ30cmと4.6m×2.0m、深さ20cmを測る。このほか東西に長い楕円形土坑SK6248や、調査区の中央部に径1.0mほどの小土坑SK6247がある。

(6) 平安時代前Ⅱ期の遺構

掘立柱建物Ⅰ棟、土坑3、井戸1、溝2がある。

調査区北東にあるSB2390は3間×2間の東西棟建物で、南側と西側にこの建物を囲うように並行する2条の溝、SD2399とSD2403が検出された。溝幅はいずれも60cm前後であるが、深さは、SD2399が30cmであるのに対し、SD2403は10cm足らずと浅い。これらの溝は西で北へほぼ直角に折れ、北へ向かうが、徐々に浅くなるため、痕跡をとどめる程度になっている。そのため第46次調査では、これらの溝の延長部分が確認されていない。

井戸SE6240は方形の素掘り井戸で、上面を2.2m四方で、深さ10cmほど浅く掘り窪め、さらにその中心部分を1.2m四方で垂直に掘削している。深さは遺構面から3.7mで井戸底に達し、絶対高は5.35mを測る。残念ながら木製品の出土を見なかったが、深さ180cm以下から土師器杯・皿・壺・黒笹90号窯式の灰細陶器が出土した。

土坑はSB2390の周辺で、SK2807・SK2809・SK2398の3基が確認された。

(7) 平安時代末期の遺構

調査区の北東で小土坑SK6250、溝SD2395を、調査区の西でSD6214を確認したのみである。

SD2395は幅70cm～80cm、深さ20cm前後で、鎌倉時代の溝SD6231が急に北へ向きを変える地点の手前で終わる。

SD6212は上端で幅1.5m、下端で30cm前後を測る法面の緩やかな溝である。南西に向かって徐々に深く掘られ、北東端は、SD6230に合流するような形で終わる。

(8) 鎌倉時代の遺構

調査区の西で十字に交叉する南北溝SD2784と東西溝SD6231を確認したのみである。

SD6231は、溝幅1m前後、深さ45cmを測る。SD2784の手前で一端浅くなるが、SK6210の埋土を切って、再び南西方向に延びる。一方東端は、急に北へ折れ曲がり、第46次調査で確

認め南北溝 S D 2799 に接続する。

(9) 時期不明の遺構

調査区南西部の 3 間×2 間の東西棟建物は、奈良時代中期の土坑 S K 6255 や、奈良時代末期～平安時代初期の欄列 S A 2800 の柱掘形を切り、これより新しく、鎌倉時代の溝 S D 2784 に切られ、これより古いものであるが、平安時代のどの時期に属するかは、出土遺物からは判断できなかつた。

調査区南東部の東西棟建物 S B 2405、S B 2407 も、同様に柱掘形内出土遺物が細片のため、時期決定ができなかつた。なお、S B 2405 は、平安時代前 I 期の土坑 S K 2402 を切っており、これより新しいことは判明している。

このほか S D 2784 の東側を並走する S D 6230 は、奈良時代中期の土坑群の埋土を切り、これより新しいが、出土遺物が乏しいため、時期不明とした。

(10) 遺物

遺物は整理箱（テンバコ）で総数 127 箱が出土した。この内の 72 箱が奈良時代中期の土坑から出土したものである。同じ鍛冶山地区でも、当区画の西の区画で実施した第 44 次調査では、平安時代前 I 期～前 II 期の土器が大半を占めており、出土遺物の様相に大きな違いをみせている。ここでは、奈良時代中期の土坑一括資料を中心に概述することとし、加えて、平安時代初期に位置付けられる S K 6246 出土土器、ならびに平安時代前 II 期の S B 6240 出土土器についても若干触れておきたい。

A. S K 6225 出土土器（1～42）

土師器碗・杯 A（高台の付かないもの）・杯 B（高台の付くもの）・皿 A・皿 B・蓋・高杯・甕・須恵器杯蓋・短頸壺蓋・無台盤・有台盤・高杯・甕 A（頸部が長く、口縁部がラッパ状に大きく開くもの）・甕 B（口頸部が短い広口のもの）がある。

土師器碗（1～5）は、淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む通称「いなか碗」と呼んでいるものである。粘土ひも巻き上げ痕跡をとどめるものが多くみられ、たいいてい左回りに巻き上げて成形される。口径 12.2cm～13.6cm、器高 3.4cm～4.0cm で、径高指数 25～29 を示す。碗（5）の底部には、焼成後に穿孔された径 1cm ほどの穴があく。

土師器杯 A（6～11）には、杯部の浅いもの杯 A a と杯部の深いもの杯 A b があり、さらに法量の違いにより大小がある。口径 18.1cm、器高 3.7cm、径高指数 20 を示す（11）が杯 A a I、口径 15.0cm～16cm、径高指数 22～23 を示す（6）～（9）が杯 A a II、口径 16.0cm、器高 4.2cm、径高指数 26 の（10）が杯 A b II に相当しよう。器面の調整は底部をヘラケズリする b 手法が主流を占めるが、口縁部外面をヘラミガキするもの（11）や、外面全面をヘラケズリする c 手法のものも若干みられる。また b 手法といっても底部から体部の中ほどまでヘラケズリするもの

が大半を占める。内面の暗文については、器面の保存が悪いため、その有無について明瞭でないが、底部に螺旋暗文・口縁部内面に放射状暗文を施すもの(8・11)や、底部中央から描き始めた螺旋暗文が口縁部中ほどまでおよぶもの(10)がみられる。

土師器杯B(12)は、口径11.5cm、器高3.2cmの小型品。底部に低くて幅の広い高台が付き、外端で接地する。

土師器杯蓋(13~15)は、天井部が平坦で、偏平な鈕を有するものである。口径21.4cmの大(15)、口径18.2cmの中(14)、口径13.8cmの小(13)がある。天井部はいずれもヘラミガキされるものと思われるが、器面が磨滅しており調整はよくわからない。蓋(16)は偏平な杯を拵せたようなものに、縦に偏平な紐の付く特殊な蓋で外面を丁寧にヘラミガキした赤褐色を呈する粗土精良な土器である。

土師器皿A(17~21)には、口径23.8cm、器高2.5cmの皿AⅠ(21)と、口径21cm前後、器高2.4cm~2.9cmの皿AⅡ(18~20)、口径16.2cm、器高2.2cmの皿AⅢ(17)がある。器面の調整はb手法が主体的で、c手法のもの(19)も若干みられる。内面の暗文については、器面の保存が悪く、不明なものが多い。

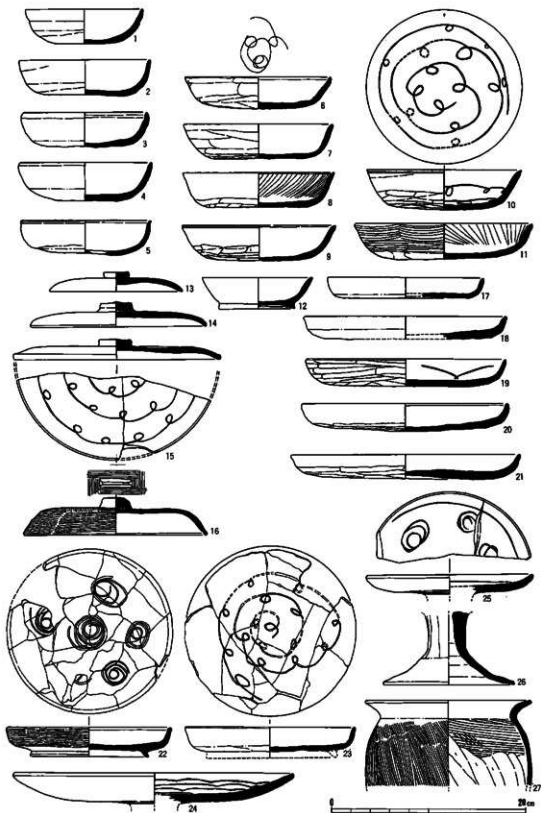
土師器皿B(22・23)は、皿Aに八の字形に開く低い高台の付くもので、口径17.2cm~17.8cmと皿AⅢより一回り大きい。外面を丁寧にヘラミガキするもの(22)とヘラケズリするもの(23)がある。(22)は底部内面に渦巻状の暗文を中央とその周辺に5ヶ所以上に配し、(23)は底部内面外縁から中央部に向かって螺旋暗文を3重に施す。

土師器高杯は、口径29.0cmの大型のもの(24)と17.0cmの小形のもの(25)がある。(24)の内面には5重の連弧状暗文を、(25)には皿B(22)と同様の暗文を施す。

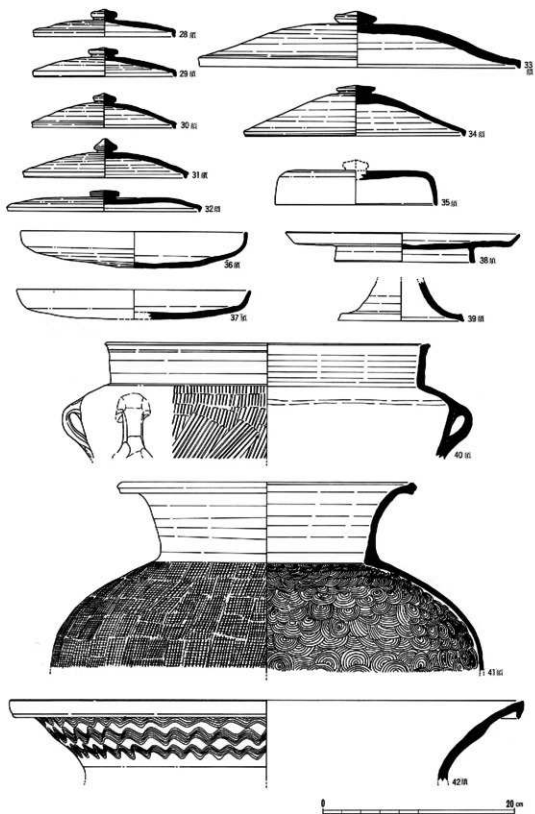
土師器甕(27)は体部上半部のみであるが、口径17.0cmで、口縁部がくの字形に外反し、端部が丸く終わるものである。器面は、外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整し、体部下半はヘラケズリする。

須恵器杯蓋(28~34)には、口径33.6cm、器高5.9cmの超大型品(33)、口径23.0cm、器高5.3cmの大型品(34)、口径16.8cm~20cmの中型品(31~32)、口径14.7cm~15.0cmの小型品(28~30)があり、バラエティーに富む。これらの中には、天井部が極端に低いもの(32)や宝珠形の紐が付くもの(31)もみられる。天井部のロクロヘラケズリは、小型品では中心と外縁との中間あたりまでおよぶが、大型品では、天井部のほぼ全面をヘラケズリする。なお、これらの杯蓋に対応する杯類がみられないのが疑問として残る。蓋(35)は短頸壺の蓋となろう。

須恵器無台盤(36・37)は、底部が丸く、口縁部との境に明瞭な稜線を有しないものである。(36)は口径23.6cm、器高3.8cm。(37)は口径24.4cm、器高3.1cmで、底部は幅4mm前後の細かいロクロヘラケズリが行われる。



第20図 第88次出土遺物 S K 6225 ; 1 ~ 27



第21図 第88次出土遺物 S K 6225 ; 28~42 (41は 1 : 6)

須恵器有台盤(38)は、底部が平坦な盤に比較的高い高台が付くもので、口径24.4cm、器高3.0cmを測る。

須恵器高杯(39)は、脚裾部外縁に面をもつ高杯脚部片と思われる。

須恵器壺B(40)は、まっすぐ立ち上がる短い口縁部に、短く張り出す肩部がつくものである。口縁端上面にやや内傾する平坦な面をもち、肩部と体部の境の体部側に環状の把手が付く。

須恵器壺A(41・42)は、口縁部がラッパ状に大きく外側へ開くものである。(41)は口径47.0cmで、口縁端部を三角形に肥厚させている。(42)は口径53.6cmで、口縁端部を下方へ垂下させ、外縁帯を作り出している。口頸部に3条の櫛描波状文が巡る。

B. S K 6220出土土器(43~70)

径1.5m×1.2mの小土坑から出土したもので、他の土坑との切り合いがなく、資料的に一括性が高い。おもなものに土師器碗・杯A a・杯A b・皿A・皿B・蓋・高杯・壺、須恵器杯・蓋・無台盤などがある。器種構成、分量、器面の調整の点で基本的にS K 6225出土土器と大差ないので、ここでは特筆すべきことのみ記述することにする。

土師器杯Aの中で、新たに口径14.8cm、器高2.7cm、径高指数18を示す小型で浅い杯A a III(47)と、口径19.4cm、器高5.7cm、径高指数29を示す大型で深い杯A b I(51)がみられる。

土師器杯B(52)や蓋(54)は小型品ながら外面を丁寧にヘラミガキし、内面を放射状暗文や、放射状のヘラミガキで飾る胎土精良な優品である。また杯蓋(55)の内面には、2重以上の螺旋暗文が薄く残る。

土師器高杯(63)は、水平に近く開いた浅い皿部に短い脚部の付く小型品である。脚柱部はヘラによる8面の面取りがなされる。

須恵器杯には、口縁部が内弯気味に立ち上がる深いもの(66)と、口径に対し浅いもの(65)がある。(65)は口縁部の歪みが著しく、底部中央部がへこむ不良品である。腰が張り、口縁端部に外傾する面を有する薄手の土器で、底部はロクロヘラケズリがなされる。

須恵器無台盤(70)は、S K 6225出土の(36)や(37)に比べて底部と口縁部の境が明瞭で、口縁部の長さもやや長い。口径21.2cm、器高3.4cmを測り、底部内面には、幅2mmほどの粗いヘラミガキが認められる。

C. S K 6228出土土器(71~75)

S K 6226及びS K 6227出土の土器が混入している可能性が高く、純粋の一括資料とは見なし得ない。おもな器種には、土師器碗・杯A・杯B・皿A・皿B・蓋・把手付壺、須恵器杯・壺Bなどがある。

土師器杯A(71・72)は、口縁端部を弱く外反させ、端部外側に内傾する面を作るもので、底部をヘラケズリし、口縁部外面を先端の丸い棒状の工具で丁寧に磨くものである。底部内面



第22図 第88次出土遺物 S K 6220 ; 43~70、S K 6228 ; 71~75 (75は 1 : 8)

には、中央部から外側に向かう3重の螺旋暗文を施し、口縁部内側には、右下りの放射状暗文を施す。いずれも明茶褐色を呈する胎土精良な完形品で、成形、調整法、暗文の施文の仕方に共通点が見られるところから、おそらく同一工人の手によるものと思われる。(71)は、口径16.4cm、器高4.3cm、径高指数26を示し杯A b IIに、(72)が口径21.4cm、器高6.0cm、径高指数28を示し杯A b Iに分類できよう。

共伴する須恵器には、底部が丸くてロクロヘラケズりするもの(73)と、底部が平坦で糸切り後、外縁を手持ちヘラケズりするもの(74)がある。(73)は愛知県日進町岩崎25号窯出土の杯Bに分類されたものに相当し、糸切りの出現や、杯Bの出現は、8世紀中葉の岩崎25号窯式から始まるとされているところから、本資料の年代の一端をこの頃に求めることができよう。

約半分が残存する須恵器甕B(75)は、口径57.6cm、器高40.4cmを測る大型の広口甕である。口縁部は弱く外反気味に立ち上がり、口縁部上面に平坦な面を作る。器面の調整は内外面を叩き締め、底部及び体部の一部をヘラケズりする。

D. S K 6226出土土器(76~103)

おもな器種に土師器碗・杯A a・杯A b・蓋・皿A・皿B・把手付大型浅鉢・甕・把手付甕・片手甕、須恵器杯蓋・無台盤・大型浅鉢・甕B・台付広口甕などがある。

土師器碗(76~79)には、口径13cm以下のものが見られず、S K 6225・S K 6220出土のものに比べて底部の平坦なものが多い。

土師器杯Aでは、杯A a III(81)よりさらに口径の小さい杯A a IV(80)や、口径14.6cm、器高4.2cm、径高指数29を示す杯A b III(82)がみられる。

土師器皿Aでは、底部が比較的平坦なもの(91~93)と、底部がやや丸く、口縁部が内湾するもの(89・90)がみられる。

器面の調整は個体数が少ないので断定はできないが、土師器杯・皿ともb手法のほかc手法も多く認められ、外面をヘラミガキするものや、暗文を施すものは少ないようである。

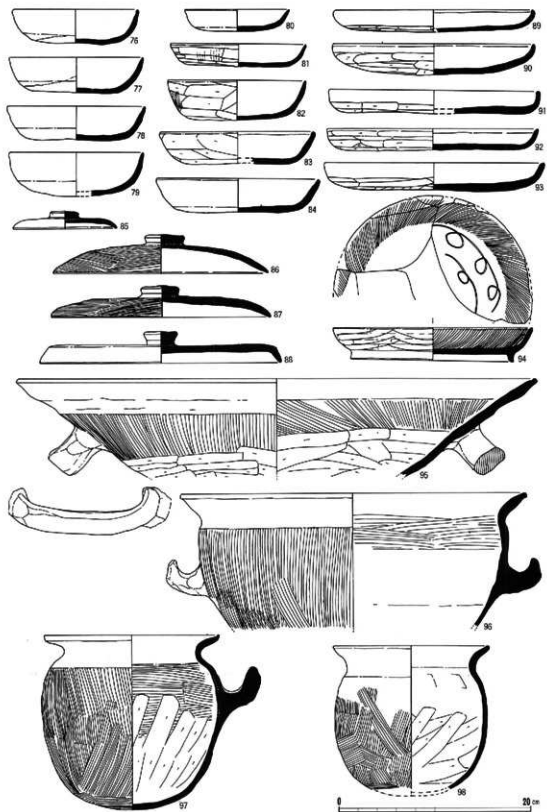
皿B(94)は、S K 6225出土の(22)、(23)やS K 6220出土の(62)より一回り大きく、皿Bの大小関係が存在するものと思われる。口径20.6cm、器高3.5cmで、口縁部外面はヘラケズリ後ヘラミガキし、内面には螺旋暗文や左下がりの細かい放射状暗文がみられる。

土師器蓋には、天井部が平坦で、端部を下方に折り曲げたもの(88)も新しくみられる。

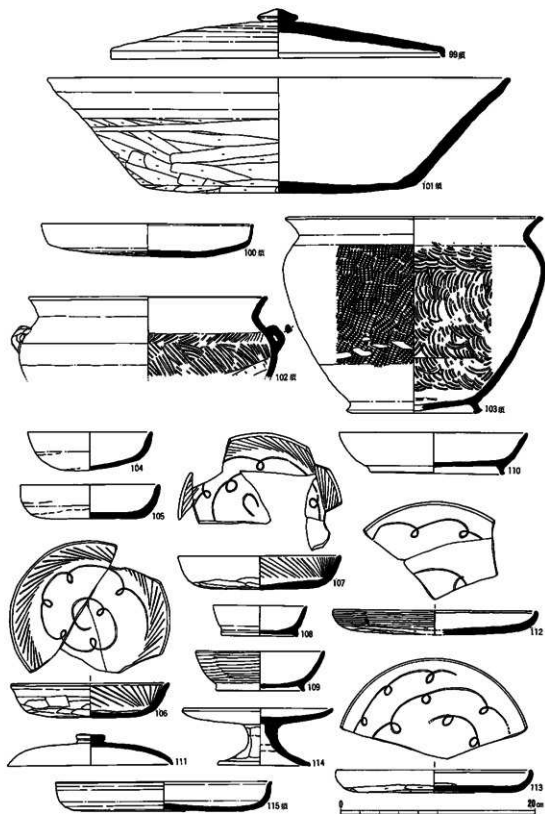
土師器把手付浅鉢(95)は、底部から口縁部にかけて直線的に大きく開くもので、口縁部をヨコナデし、上半をハケメ調整し、下半を横方向にヘラケズりするものである。体部と直接接合できなかったが、剥落した把手は、手の平の幅ほどもある。

須恵器杯蓋(99)は口径34.6cmの超大型品である。

須恵器大型浅鉢(101)は、平坦な底部に、ほぼ直線的に大きく開く体部・口縁部から成り、



第23図 第88次出土遺物 S K 6226 ; 76~98



第24図 第88次出土遺物 S K 6226 ; 99~103、S K 6227 ; 104~115 (102・103は 1 : 6)

内外面を粗くヘラケズリし、口縁部をヨコナア、内面をナアで仕上げる。口径48.0cm、器高12.0cmを測る。

甕B (102) は、口径37.4cmで、口縁部はくの字形に外反し、肩部の張りは、S K 6225出土の(40)に比べ弱い。環状把手は肩部側に付く。体部最大径より上半はナアで仕上げるが、内面にはタタキメの跡がよく残る。体部外面下半はヘラケズリされるようである。

台付広口甕 (103) は、口径40.2cm、器高30.4cmで、S K 6228出土の(75)に比べ一回り小さく、底部と体部との境に八の字形に開き両端が肥厚する高台が付く。高台は内端で接地する。口縁の外反は(75)に比べて大きい。

E. S K 6227出土土器 (104~115)

S K 6226と切り合い、これより新しい土坑の一括遺物である。したがってS K 6226に廃棄されたものが混入する可能性がある。おもなものに土師器碗・杯A a・杯B・甕・皿A・高杯、須恵器皿がある。

土師器杯A a (106・107) は、口径17.0cm、器高3.5cm、径高指数21で、S K 6226出土の杯A a (84) とほぼ同一の法量である。

土師器杯Bは小型のものに加え、口径19.3cmの大型のもの(110)もみられる。

土師器皿(112・113)は、いずれも口縁部が内弯するもので、底部に螺旋暗文がみとめられる。(112)は、口縁部外面をヘラケズリ後ヘラミガキする。

F. S K 6210出土土器 (116~155)

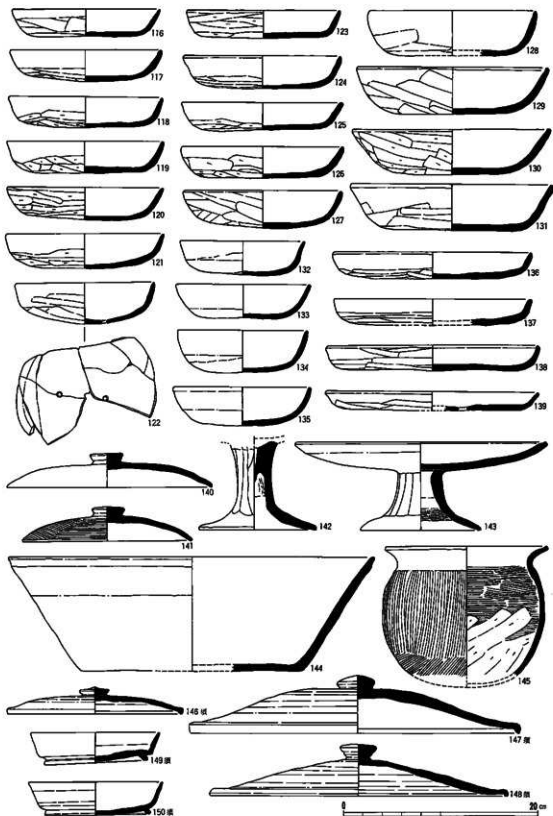
単一の土坑で、しかも遺物の大半が埋土下層からの出土であるので、良好な一括資料とみなし得る。

おもな器種に土師器碗・杯A a・杯A b・甕・皿A・高杯・鉢・甕、須恵器杯・甕・無台盤・長頸瓶・大型浅鉢などがある。

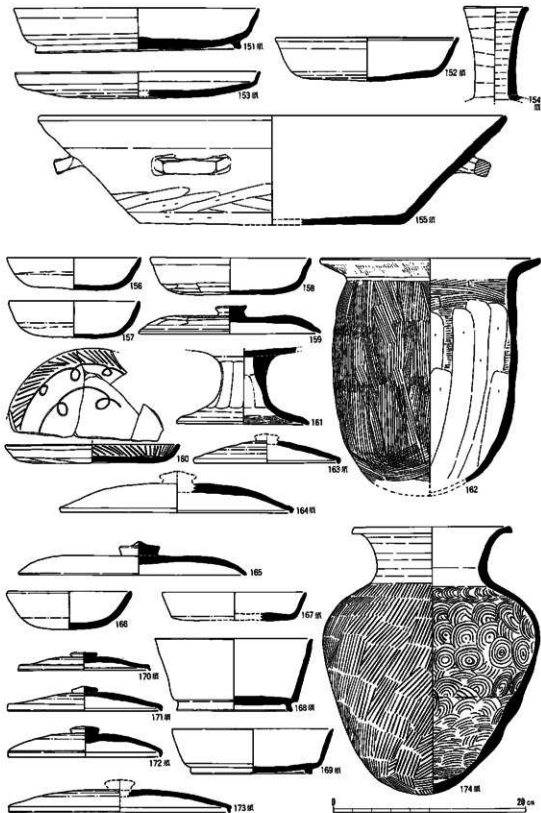
土師器碗(132~135)は、口径13.0cm~14.4cm、径高指数26~33を示し、浅いものや深いものがあり、これまで述べてきたものとあまり変化はない。

土師器杯Aには、径高指数24以上の深い杯部を呈するもの杯A b、径高指数17~23の浅い杯部を呈するもの杯A aがある。それぞれ法量に応じて杯A b I~Ⅲ、杯A a I~Ⅲの3種がある。口径17.4cm~20.4cmの(128~130)が杯A b Iに、口径16.6cmの(127)が杯A b IIに、口径14.5cmの(122)が杯A b IIIに、口径21.0cmの(131)が杯A a Iに、口径16.5cm~16.8cmの(123~126)が杯A a IIに、口径15.4cm~16.2cmの(116~121)が杯A a IIIにそれぞれが該当しよう。なお杯A a IIとA a IIIとは、A a IとA a IIとのような明瞭な法量差はない。器面の調整は杯A a、杯A bともc手法が50%以上で、b手法でもc手法に近いものである。

皿A (136~139) は、口径22cm前後のもの(138・139)と、これよりやや小さい口径20.4cm



第25圖 第88次出土遺物 S K 6210 ; 116~150



第26図 第88次出土遺物 S K 6210 ; 151~155、S K 6221 ; 156~164
S K 6215 ; 165~174 (174は 1 : 6)

～21.2cmのもの(136～138)があるが、明瞭な法量差は認め難い。器面の調整はb手法とc手法がみられる。1点だけ(139)のように、口縁部が外反するようにヨコナデされて、平安型の皿の口縁部に似たものが認められる。またこの皿には、杯(122)と同様、底部に小さな穿孔がある。

なお暗文については、土師器杯・皿類とも器面の残り具合にもよるが、明瞭に認められたものはない。

高杯は、脚柱部の短いもの(143)のほか、これよりやや長いもの(142)もみられる。ヘラによる面取りは、それぞれ14面、15面を数え、幅の狭いものである。

土師器鉢(144)は、平坦な底部に直線的に開く体部・口縁部から成り、口径38.0cm、器高11.9cmの大型品である。底部は未調整で、口縁部はヨコナデし、体部は内外面ともヨコ方向の板ナデを施す。

須恵器杯には、高台の付くもの(149・150)と付かないもの(152)があり、さらに前者には、口径13.3cm～13.8cmの小型品と口径25.3cmの大型品がある。高台はいずれもやや外側へ開く角高台で、底部中央部が接地面近くまで垂れるものである。(152)は、口径19.0cm、器高4.5cmで、全体に器壁を薄く仕上げしており、口縁端部内側に段状の沈線が巡るものである。形態的には、土師器杯Aaに近似しており、これを模倣して製作されたものかも知れない。

須恵器盤(153)は、弧状の底部に鋭く上方に屈曲する口縁部が付く。口径25.5cm、器高2.8cmで、底部をロクロヘラケズリし、口縁端部は丸く仕上げる。

須恵器長頸瓶(154)は、頸部のみで体部は不明。内外にロクロメがよく残り、基部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめ、外縁帯を作らないものである。

須恵器大型浅鉢(155)は、SK6226出土の鉢(101)とほぼ法量が同じで、このタイプに一对の角ばった環状把手を取り付けたものである。

G. SK6221出土土器(156～164)

おもなものに土師器碗・杯Aa・蓋・皿A・高杯・壺・長壺・把手付壺、須恵器杯蓋・大型浅鉢などがある。

土師器杯Aa(158)は、口縁端部が弱く屈曲し外反するもので、形式的に次時期の杯につながっていく特徴をもつ。

土師器皿A(160)は、口径18.0cm、器高2.0cmを測り、SK6210出土の皿Aよりも一回り小さいが、内面に線線暗文と放射状暗文が施される。

土師器長壺(162)は、口縁部のみ大きく外側へ開き、肩や体部があまり張らないもので、口径に対し胴部が短い。

須恵器杯蓋(164)の天井部には、濃緑色の自然釉が厚くかかる。

H. S K 6215出土土器 (165~174)

土取りによる破壊から辛じて免れた土坑底部から出土した一群で、良好な一括資料とは言えないが、土師器よりも須恵器の出土量が多かったのが取って取りあげた。おもなものに土師器碗・壺、須恵器杯・杯蓋・甕A・甕Bなどがある。

須恵器杯には、無台の浅いもの (167)、口径14.4cm、器高7.6cmで杯部が深く高台を有するもの (168)、口径16.8cm、器高4.7cmで杯部の浅い高台を有するもの (169) がみられる。

甕A (174) は、小さな丸底の底部に、肩の張る体部がつき、口縁部が大きく外反するもので、口縁端部外面に内傾する面をもつ。口径24.2cm、器高42.4cmで、暗青灰色を呈する。

I. S K 2798出土土器 (175~196)

遺物の大半が第46次調査で出土していたものであるが、前回未報告であった土師器浅鉢・カマドや須恵器甕類の大型製品が共存しているので、出土遺物の時期の見直しの問題もあるので再び取り上げることにした。

土師器杯A a (177~179) は、口径16.0cm~16.8cmで、径高指数19~21を示す。器面の調整は3点ともc手法である。

土師器皿Aは、口径21cm前後のもの (180・181)と23.8cmの大型のもの (182) がある。(182) はb手法であるが、(180) は、底部をナデて仕上げ、口縁部を弱く外反させる点で次時期につながる新しい要素を内包している。

土師器大型鉢には、S K 6210出土の (144) のように、平坦な底部に直線ないしやや内弯気味に開く体部・口縁部がつき、外面をヘラケズりする (184) と、これより口縁の外反度が強く、上半をハケメ調整し、下半をヘラケズりするもの (185) がある。(184) が口径38.0cm、器高13.0cm。(185) が口径57.6cmである。

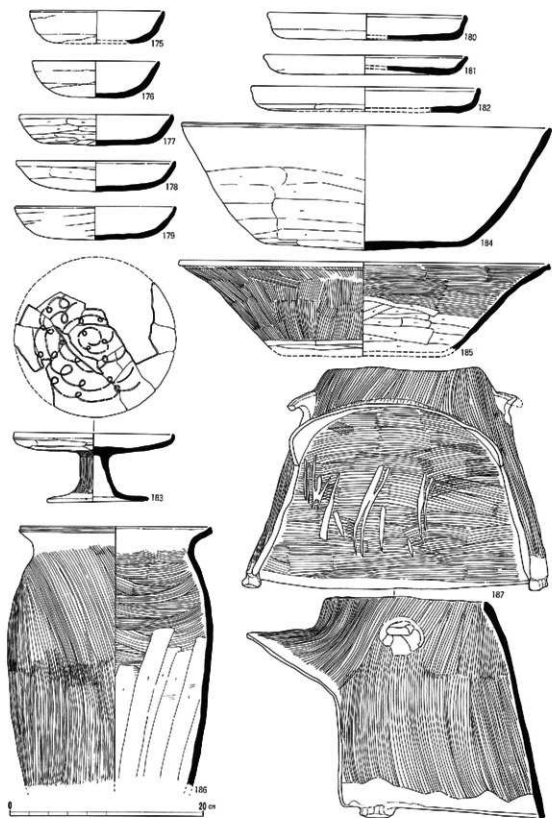
土師器高杯 (183) は、口径16.8cm、器高7.1cmで、平坦な皿の外縁が上方に屈曲し、脚柱部はヘラによる面取りではなく、タテ方向のハケメが施される。

ほぼ完形の土師器カマド (187) は、鈎が比較的長く、ほぼ水平に取り付く。上面の内径は、22cmで、内側をヘラケズリするため、上端の平坦面は6mmほどである。最大幅47.5cmで、器高は34.5cmである。

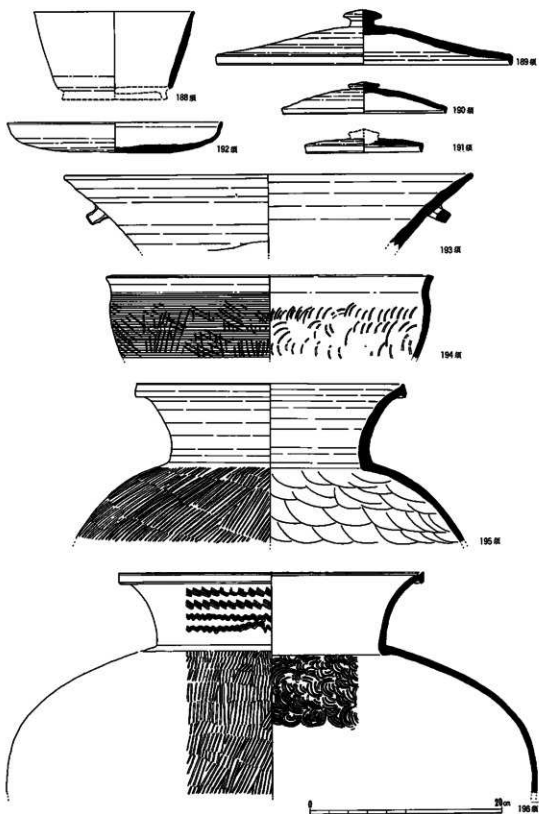
須恵器には、深い杯部を呈する杯 (188)、大・中・小の杯蓋 (189~191)、盤 (192)、大型浅鉢 (193) のほか、甕B (194) や甕A (195・196) がある。

甕B (194) は、口径50cmを測る。肩がほとんどなく、わずかに外傾する短い口縁部をもつもので、体部内外面に粗いタタキメを残し、さらに外面にカキメを施す。

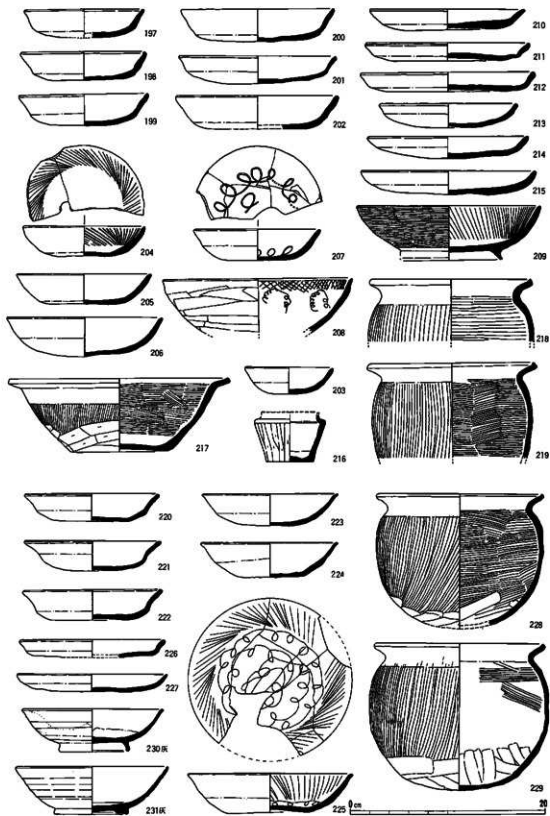
甕A (195・196) の口縁端部は、いずれも上下に肥厚させ、外縁帯を設けるもので、(196) の頸には、4条の溝描波状文が巡る。(195) は口径28.0cm、(196) は口径64.0cmの大型品である。



第27図 第88次出土遺物 S K 2798 ; 175~187 (185・187は 1 : 6)



第28図 第88次出土遺物 S K 2796 ; 188~196 (194は 1 : 6、196は 1 : 8)



第30图 第88次出土遺物 S K 6246 ; 197~219、S E 6240 ; 220~231

J. SK6246出土土器 (197~219)

平安時代初期の良好な一括資料として紹介しておく。

土師器杯には、口縁部が外反するもの (197~202) と、碗形を呈するもの (203~208)、これに高台の付くもの (209) がある。それぞれ法量に応じて少なくとも大・中・小の3種がある。外面をヘラケズリし、内面を格子目暗文や変形螺旋暗文で飾る (208) は、あるいは高台の付くものかも知れない。

土師器皿も杯の口縁部の形態と呼応し、(210~212) の群と (213~215) の群の2類に分かれ、杯と同様、それぞれ大・中・小の3種がある。

K. SE6240出土土器 (220~229)

黒笹90号窯期の灰釉陶器が伴件し、平安時代前II期に位置付けられる一群である。

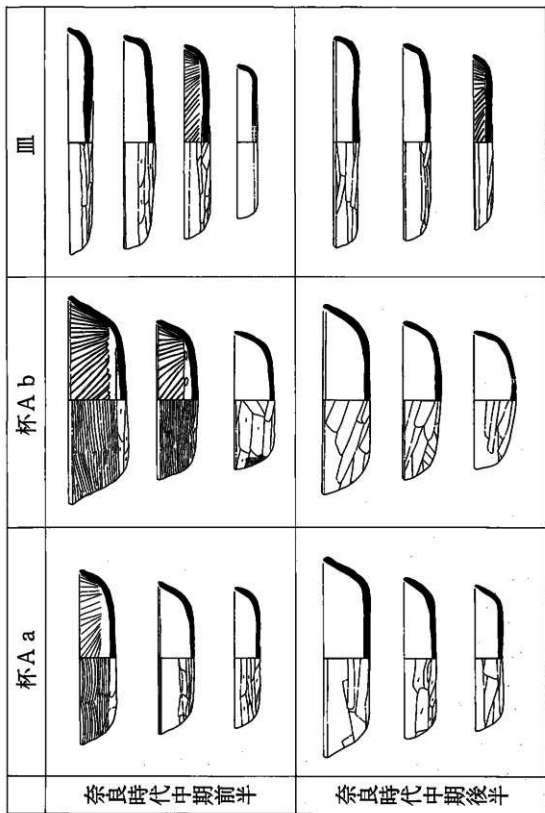
土師器杯・皿は、平安時代初期のSK6246出土のものから系譜をひくすすべての種類のものがみられる。ただ器壁や法量が減じ、大・中・小のセット関係は崩れている。土師器甕の器面の調整は、奈良時代のものと同じく変わっていないが、ハケメは若干粗く、体部は球形に近いものとなっている。

以上、奈良時代中期の土器の様相について主として触れてきたが、ここで編年の基準となるべく土師器杯・皿類についてまとめておきたい。伴件する須恵器は、8世紀中葉に位置付けられている岩崎25号窯式に出現をみる杯Bや糸切り底の杯(碗)がみられるが、杯蓋は、法量分化が著しく、無台盤についても8世紀前半の高蔵寺2号窯出土のものに類似するものもみとめられる。一方8世紀後半とされる鳴海32号窯式に普遍的にみられる底部外縁の面取り風ヘラケズリが顕著な杯Bや、口縁端部を外方へ引き出す盤がみられない。以上の点で伴件する須恵器は概ね岩崎25号窯式の中におさまるものと考えられる。

土師器杯は、暗文が多用化されているか否かで、SK6225・SK6220・SK6228・SK6226・SK6227出土の一群とSK6210・SK6221・SK6215・SK2798出土の一群とに大きく分けられる。器面の調整においても、前者の一群はb手法を主体としながら、c手法やヘラミガキがみられるのに対し、後者の一群では、c手法やこれに近いb手法が主体的である。法量をみてみると、径高指数24以上の杯部が深いものと、23以下の浅いものがあり、口径の大きさによってそれぞれ杯A b I~III、杯A a I~IIIのおよそ3つに分かれる。こうした傾向は、前者、後者とも一環して認められるが、後者の方が、中型品と小型品とにおいて法量分化が明瞭でなくなりつつあり、径高指数をみても20前後のものも多く、より偏平化が進んでいる。

土師器皿は、前者の一群も後者の一群も、法量の上で大きな変化は認められないが、後者の中に口縁部が若干外反する新しい要素がみられるものが登場する。

このほか後者の一群には、器面を丁寧にヘラミガキする小型の杯Bや、皿Bなどもみられる



第29圖 奈良時代中期土器碗・皿

い。

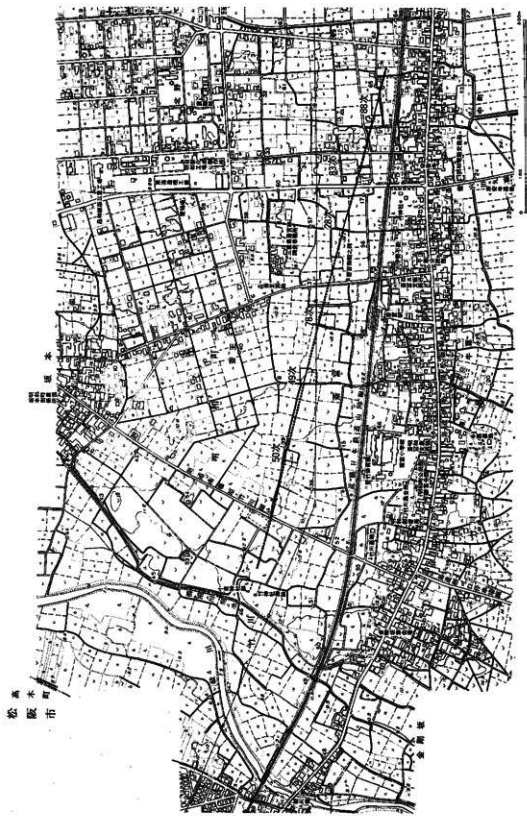
以上のような点で8世紀中葉の中でも、前者の一群の方が、後者の一群よりも古い一群であろうと考えられる。ここでは、一応前者の一群を730～750年に、後者の一群を750～770年頃と考えておきたい。

(11) まとめ

今回の調査で特に注目された遺構として、奈良時代前期の溝S D2404、大型総柱建物S B6237・S B6238、櫛列S A2800、及び奈良時代中期の土坑群がある。

溝S D2404は、検討した結果、第49次・50次・78次調査で検出の溝S D170の延長線上に位置することがわかったほか、史跡東部で既に実施した第28次調査で確認のS D1327や第83次調査のS D5855もほぼこの延長線上にのり、溝S D170は少なくとも総延長1 km以上にわたり、まっすぐに走ることが確認されるに至った。また第28次・83次・88次調査では、浅くて一部しか確認されていないが、S D170の南側でもこれに並走する溝の存在が再確認された。したがってこの溝を道路の南側溝と考えるならば、両溝に挟まれた部分を道路遺構とみてまちがいないであろう。計測値は、溝の心々で8.9m～9.0mで、造営当初の平城宮・京の造営尺である一大尺=35.5cmをあてはめると約25大尺に復元できる。既に足利能亮氏が指摘されているように、このS D170を側溝とする古道の西への延長線上には、小字の境が明瞭に残っているところや、旧参宮街道に合致する部分や、早馬瀬、駅部田といった駅制に関係する地名が残っているところから、宮道としての性格をもった伊勢神宮への道（伊勢古道）の存在が想定される。なお、溝S D170の埋土の土器は、斎宮跡土器編年のSK3000に相当し、8世紀前半には埋没が始まっており、しかも50次調査では、中層・上層からの出土が多いとされているところから、奈良時代でも早い時期に埋まったものと考えられる。しかし史跡東部の基盤目状区画の西限以西では、少なくとも平安時代後～末期までS D170と同一方向の溝が存続しており、掘立柱建物の方向もこれに揃うものが認められる点に着目すれば、道としての機能は基盤目状区画の外では、この頃まで存続していたものと思われる。

次に大型掘形をもつ総柱建物について触れておきたい。第46次調査のS B2780及びS B2810の建物を合わせ、計4棟の倉庫と考えられる総柱建物が集中して検出されたことになる。これほどの規模をもつ総柱建物の検出例は、今のところ当地を除いてはない。これら4棟の建物は、時期を検討した結果、倉庫群を形成していたものではなく、奈良時代中期から平安時代初期の間で、順次S B2780→S B6238→S B6237→S B2810の順で建て替えられたものと思われる。一方この倉庫の機能についてであるが、奈良時代中期以降の土坑出土の土器は、多量の土師器、須恵器の食器類や須恵器甕類などの貯蔵用製品が主体をなす点や、SK2798から須恵器杯あるいは甕と思われる底部に「膳」という文字を墨書したものが出土している点、長期間一定の場



第31図 清SD170及び古道推定線

所に倉庫としての機能をもった大型総柱建物を維持せねばならなかった必然性等を考慮すれば、これら4棟の建物を膳部司にかかわる、食器類や穀物などを保管する倉庫とみなすことも可能であろう。

櫛列SA2800については、南へ12間以上延びることが確認されたが、残念ながらこれに取り付く門や、SB2790以外、櫛内の建物は検出されなかった。この櫛列と柱間も同じで柱形の規模もよく似た櫛列が、これより約165m西で第44次調査のSA1411として確認されているが、柱間2.96mで計るとこれに合わないところから、両櫛列はそれぞれ別の区画を形成するものと考えられる。なお、SA2800の東西方向の櫛列と並行する区画溝SD2400との関係については、目下方向がE4°Nで同じであるところから同時期と考えているがSA2800が西へ折れて約41mのところ南北方向の区画溝が想定されるところから、次年度の調査でここに区画溝が検出されればその前後関係については明らかになるであろう。もし区画溝が検出されなかった場合は、一辺120mの溝による区画とは異なる新たな櫛列による区画を鍛冶山地区では想定せねばならないであろう。

この櫛列の東側では、これとほぼ同時期と思われる3間×2間の小規模な建物が最も多い時点で数棟建ち並ぶが、西加座地区で検出されている同時期の官衙を構成する中心的な建物群とは比ぶべくもない。

遺物では、斎宮跡土師器編年の奈良時代中期の標式遺構となっていたSK1098以外にこの時期の良好な土坑一括資料が得られた。今回、土師器杯・皿の法量変化や器面の調整法の変化に着目し、奈良時代中期の土器を750年を境として、中期前半の一群と中期後半の一群とに編年を試みた。なかでも中期後半と考えた一群が現在奈良時代末期～平安時代初期と考えている一群とどうかかわるのか、あるいは、両時期を埋める土器群がいかなる様相を呈するのかは、今後の課題である。

〔注〕

- ① 第46次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1982』
- ② 第21-1次調査『斎宮跡発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会1979
- ③ 第41次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1981』
- ④ 植崎彰一・斎藤孝正『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会1984
- ⑤ 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」『探訪古代の道』第一巻1988
- ⑥ 第44次調査『三重県斎宮跡調査事務所年報1982』

掘立柱建物・塀一覧表

S B	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
第86次調査 (6 A F H - F · G · H)								
6000	4 × 2	E 4° N	9.6	5.2	2.4	2.6	奈良後	S B 6037より古 S B 6040より古
5920	5 × 2	E 4° N	12.5	4.8	2.5	2.4	平安初	第84-2次調査で検出 南面南 廊柱間2.7m
6020	5 × 3	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	
6021	5 × 2	E 4° N	12.5	4.8	2.5	2.4	◇	
6028	(3) × 2	E 3° N	—	3.8	2.0	1.9	◇	
6037	(3) × 2	E 4° N	—	4.8	2.5	2.4	◇	
6040	4 × 2	E 4° N	—	5.2	2.4	2.6	◇	
6055	(4) × 3	E 3° N	—	4.8	2.2	2.4	◇	
6076	(1) × 2	N 3° E	—	3.8	—	1.9	◇	S B 6037より古 南面南 廊柱間2.4m
5924	(4) × 2	E 4° N	—	5.0	2.4	2.5	平安前 I	第84-2次調査で検出 S B 6051より古
6051	(4) × 2	E 0°	—	4.6	2.2	2.3	◇	
6063	3 × 2	E 6° N	6.6	3.8	2.2	1.9	◇	
6068	(2) × 2	E 2° N	—	3.8	2.2	1.9	◇	
6077	(1) × 2	N 2° E	—	3.8	—	1.9	◇	
6010	(5) × 2	E 4° N	—	4.6	2.3	2.3	平安前 II	柱間不揃い
6052	(4) × 2	E 0°	—	3.8	2.0	1.9	◇	
6019	3 × (2)	N 2° W	5.7	—	1.9	1.9	◇	
6022	(2) × 2	E 2° N	—	3.6	1.7	1.8	◇	
6023	(2) × 2	E 3° N	—	4.8	2.4	2.4	◇	
6024	(3) × 2	E 2° N	—	3.7	1.8	1.85	◇	
6025	(1) × 2	E 2° N	—	4.0	—	2.0	◇	
6029	3 × 2	N 3° W	6.0	3.4	2.0	1.5 1.9	◇	
6067	(1) × 2	E 0°	—	3.6	—	1.8	◇	
6074	(4) × 2	E 4° N	—	—	2.4	2.2	◇	
6075	(2) × (1)	E 3° S	—	—	2.0	—	◇	
6079	3 × (2)	N 0°	6.0	—	2.0	2.0	◇	
6080	(3) × 2	E 2° N	—	4.4	2.4	2.2	◇	
6016	3 × 2	E 3° N	5.7	3.9	1.9	1.85	平安中	W 梁行西 3間 (柱間1.17) 梁行東 2間 (柱間1.6+1.9)
6026	3 × 2	N 0°	5.4	3.4	1.8	1.7	◇	
6036	(3) × 2	E 3° N	—	3.8	2.0	1.9	◇	
6038	3 × 2	E 7° N	4.5	3.5	1.5	1.5	◇	
6057	3 × 2	E 2° S	6.0	3.9	2.0	1.95	◇	
6059	(2) × 2	E 7° S	—	3.8	2.4	1.9	◇	
6069	(2) × 2	E 3° S	—	3.6	2.0	1.8	◇	
6078	(4) × (1)	E 2° N	—	—	1.8	—	◇	

S B	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時期	備考
					桁行	梁行		

第87次調査 (6ACE-N・Q・R)

6090	6×3	E9°N	11.5	4.8	1.92	1.6	奈良前	S B6098より
6091	4×2	E9°N	8.0	4.0	2.0	2.0	◇	
6135	4×2	N13°W	7.7	4.0	1.92	2.0	◇	
6143	4×-	N7°E	4.0	-	2.0	-	◇	
6123	(4)×2	N9°E	-	4.0	2.7	2.0	奈良中	S B6121より新しい
6124	4×2	E2°S	8.0	4.0	2.0	2.0	◇	S B6121・6130より新しい
6092	3×3	N3°E	4.3	4.0	1.43	2.0	奈良	総柱、S B6098寄り新しい
6109	(3)×-	N8°W	-	-	1.5	-	◇	
6112	(3)×-	N4°E	-	-	1.5	-	◇	
6116	(5)×3	N4°E	-	4.8	1.8	1.6	◇	S K6117より古い
6158	5×2	E11°S	9.4	4.2	1.9	2.1	◇	
6201	(3)×-	E16°N	-	-	2.0	-	◇	
6131	4×3	E8°S	8.6	6.1	2.15	3.05	平安後Ⅱ	総柱、柱穴に川原石南東隅土趾
6155	4×2	E11°S	8.6	4.6	2.15	2.3	◇	
6157	3×(2)	N13°E	7.4	-	2.47	2.4	◇	
6159	3×2	N13°E	6.3	4.4	2.1	2.2	◇	S K6161・6163より古い
6160	3×2	E12°S	6.0	4.1	2.0	2.05	◇	S K6161より古い
6106	3×2	E7°S	7.0	4.1	2.33	2.05	平安末	
6111	(4)×2	E13°N	-	2.8	1.5	1.4	◇	
6150	4×2	E9°S	9.6	4.2	2.4	2.1	◇	
6170	3×2	E6°S	6.3	3.9	2.1	1.95	鎌倉前	四圍面 南柱間、東2.2、南1.7 西2.0、北1.9 S B6170より新しい 柱穴に川原石
6174	4×3	E4°S	8.3	5.3	2.07	1.77	◇	
6119	4×3	E5°S	8.1	5.8	2.02	1.93	鎌倉中	総柱、柱穴に川原石
6120	3×3	E3°S	6.3	4.7	2.1	2.35	◇	総柱、柱穴に川原石 南東隅土趾
6134	3×-	E6°S	6.3	-	2.1	-	鎌倉後	
6162	3×2	N9°E	6.1	3.6	2.03	1.8	◇	
6165	5×5	N12°E	8.6	8.3	1.72	1.66	◇	総柱、柱穴に川原石 南東隅土趾
6180	3×3	E8°S	5.9	5.3	1.97	1.77	◇	総柱、柱穴に川原石 S B6186より新しい
6185	4×2	E5°S	8.6	3.9	2.15	1.95	◇	
6186	3×2	N10°E	5.2	3.7	1.73	1.85	◇	S B6180より古い
6187	3×2	N12°E	5.2	4.0	1.73	2.0	◇	柱穴に川原石

第88次調査 (6AGN-C・D)

2780	4×3	E5°N	7.3	6.1	1.83	2.43	奈良中	総柱建物
6237	3×2	E3°N	6.0	4.9	2.0	2.45	奈良後	総柱建物 S B6238より新しい
6238	3×3	E3°N	5.7	5.2	1.9	1.73	◇	総柱建物
6232	3×2	N0°	6.0	3.9	2.0	1.95	平安初	S B6233より新しい
6233	3×2	N3°W	5.7	3.6	1.9	1.8	◇	
6234	3×2	E1°S	6.3	4.2	2.1	2.1	◇	S K6235より新しい

S B	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
6241	3×2	E 3° N	5.7	3.7	1.9	1.85	平安初	S B6241より新しい 檜列、柱間2.96m
6242	3×2	E 3° N	6.1	4.0	2.03	2.0	◇	
2790	4×2	N 4° W	8.9	4.4	2.23	2.2	◇	
2391	3×2	E 3° N	5.5	3.8	1.83	1.9	◇	
2800		N 4° W	—	—	—	—	◇	
6251	(2)×3	E 1° N	—	7.2	1.7	2.3	平安前 I	南面廂付建物 廂柱間2.6m
2390	3×2	E 1° N	5.8	4.0	1.93	2.0	平安前 II	S B2391より新しい
6219	3×2	E 4° N	5.6	3.3	1.87	1.65	不明	S K2402より新しい
2407	(4)×—	E 3° S	—	—	1.9	—	◇	
2405	(2)×2	E 0°	—	4.1	2.4	2.05	◇	

竪穴住居一覧表

S B	規 模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	カマド	時 期	備 考
第87次調査 (6 A C E - N · Q · R)							
6098	4.0×3.2	E 7° S	20	—	東壁	奈良前期	S B6090・6092より古い
6099	4.0×3.5	E 7° S	6	—	東壁	◇	S B6098より新しい
6100	2.9×2.6	N14° E	16	—	北壁	◇	
6105	4.5×3.6	E11° S	15	—	東壁	◇	S B161より古い
6121	3.1×2.8	N 9° W	20	—	北壁	◇	S K6118より古い
6125	4.3×4.0	N 9° W	20	—	北壁	◇	
6130	5.1×3.9	E 8° S	30	—	北壁	◇	S K6128より新しい
6146	—×—	E 7° N	10	—	—	◇	
6168	4.1×—	N 4° W	6	—	東壁	◇	
161	3.3×3.3	E 6° S	25	—	東壁	◇	
6144	3.1×—	E 7° N	—	—	—	奈良	

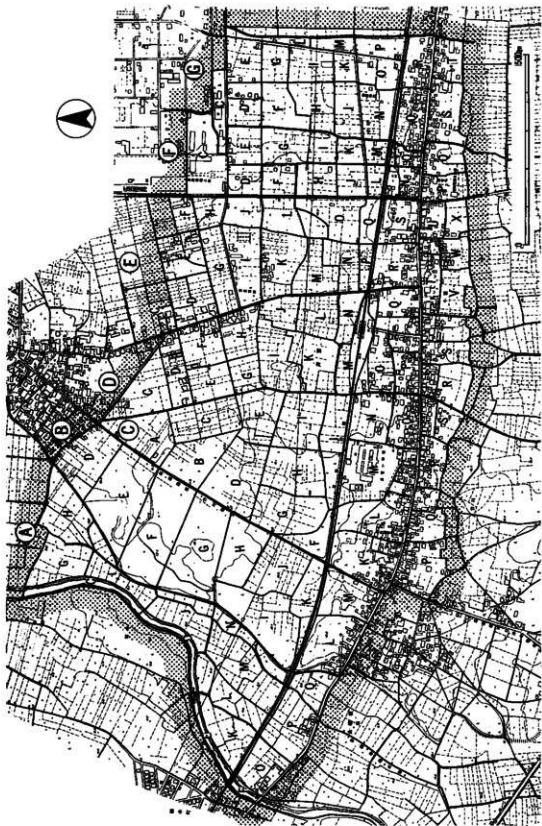
斎宮跡発掘回数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	S45	試掘	13-6	51	中垣内375-1 (南)
2	46	古里A地区	13-7		東 墓328 (小川)
3		B地区	13-8		西加座2771-1 (細井)
4	47	C地区	13-9		# 2773 (細井)
5	48	D地区	13-10		東 墓362-1 (児島)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1 (浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		# 2721-3, 2724-2 (森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-4		Dトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
7	49	古里E地区	14-3		2 Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-5		2 Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16-1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16-2		# B
8-6		Kトレンチ	16-3		# C
8-7		Lトレンチ	16-4		# D
8-8		Mトレンチ	16-5		# E
8-9		Nトレンチ	16-6		# F
8-10		Oトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-1	50	Qトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
9-2		Rトレンチ	17-4		衆 殿2894-1 (中川)
9-3		Sトレンチ	17-5		# 2895-1 (西口)
9-4		Tトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-5		Uトレンチ	17-7		# 3237-1 (屋中)
9-6		Vトレンチ	17-8		衆 殿2894-1 (西村)
9-7		Wトレンチ	17-9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6 A E L-E-I (下園)
9-9		Yトレンチ	19		6 A E N-M-N-O (御館)
9-10		Zトレンチ	20		6 A E O-I-J (柳原)
10		広域園道跡	21-1		6 A G N-B (鑑治山、中山)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-2		6 A F I-D (西加座2711-2, 2717-4他、山路)
11-2		# 2661-1 (山名)	21-3		6 A F D-D (西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-4		6 A F H-F (西加座2678, 2679-3、森下)
11-4		下 園2925-9 (吉木)	21-5		6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-6		6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-2		2 Bトレンチ	21-7		6 A F E-F (東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2 Cトレンチ	21-8		6 A E G-A (衆殿2909-3、大西)
12-4		2 Dトレンチ	21-9		6 A E D-R (篠林3218-3、宇田)
13-1		西加座2436-7 (浜口)	22-1		6 A G U
13-2		# 2436-4 (中村)	22-2		6 A G U
13-3		古 里3283 (村上)	22-3		6 A G W
13-4		衆 殿2916-2917 (松井)	23	54	6 A E L-B (下園)
13-5		御 館2974-1 (川本)	24		6 A G F-D (西加座)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区		
25-1	54	6ADP-K (牛養3029-1、三重土地本一ム)	37-12	56	6AFH-J (西加座2681-1・3-4、渋谷)		
25-2		6ACA-Y (古里3270、脇田)	37-13		6AGK-F (西加座2385-3, 2386-3、竹内)		
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	38		6ACD-S (泰山)		
25-4		6AER-H (牛養3014、牛養公民館)	39		6ABD-R・S・T (古里)		
25-5		6AGN-H (鍛冶山2392、丸山)	40		6AGH-L・M (東加座)		
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J他 (斎宮地内)		
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	42-1		57	6AEI-D・F (東殿)	
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	42-2			6AEK-A・B (東殿)	
25-9		6ACN-C (広畑3387-1、北出)	43-1			6ADC-C (出在家3235-2、永田)	
25-10		6AEV-A (鈴池339-1、永島)	43-2			6ADT-B (木業山308-1、山本)	
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43-3			6ACP-T (南裏241-1、辻)	
25-12		6AEE-Y (東殿2892-3、山本)	43-4			6ADS-D (牛養123-3、西山)	
25-13		6AFJ-E (西加座2766-1、山内)	43-5	6ADE-D (篠林3220-3、渥野)			
26-1		6AFR (中野)	43-6	6AGE (東前沖、町道側溝)			
26-2		6AEX~6ACQ (鈴池、木業山、南裏)	43-7	6ABD-F (古里588-6、今西)			
26-3		6AEV-W・X (鈴池)	43-8	6ADQ-H (牛養3025-2、大西)			
26-4		6ACR (木業山、南裏)	44	6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)			
27		6ACG-S・T (東裏)	45	6AEG-P・Q (東殿2904-2、他)			
28		6AEO-D (柳原)	46	6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)			
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47	6ADJ-D・G他 (西加座、御館、宮ノ前、上園)			
30		55	6ABJ-M・X・W (中垣内)	48-1		58	6ACM-M (広畑3385、斎宮小)
31-1			6ADO-M (内山3038-13、岩尾)	48-2	6ADP-Q (牛養3033-1・2、吉田)		
31-2			6ACP-I (南裏227-2、鈴木)	48-3	6ABL-M (中垣内434-6、西川)		
31-3			6ABD-A (古里588-4、北畠)	48-4	6AGL-B (東前沖2480、倉田)		
31-4			6ADQ-T (牛養3018-2、百五銀行)	48-5	6AGD-6AFE (東前沖、町道側溝)		
31-5			6ACC-G (堀川3338-3、水谷)	48-6	6AGC-A (西前沖3550-1、今西)		
31-6			6ABO-X (古野576-1、池田)	48-7	6ADT-H (木業山307、奥西)		
31-7			6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-8	6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)		
31-8			6ACN-G (広畑3388-1・5・8・9、森)	48-9	6AEV-J (鈴池341-1、乾)		
31-9	6AGD-L (北野2487-1、中川)		48-10	6AGT (牛養、町道側溝)			
31-10	6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)		48-11	6ADP-E (鍛冶山2351-1, 2352-1、柳原)			
31-11	6ADT-I (木業山304-2、渥野)		48-12	6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)			
31-12	6ADT-J (木業山304-7、宇田)		48-13	6ACM-O (東裏、斎宮小)			
32	6ACE-D・E・F (塚山)		48-14	6AET (牛養、町道側溝)			
33	6ADE-C・D他 (篠林)		49	6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)			
34	6AFK-F・G・H (西加座)		50	6ACH-H (東裏294, 297、山本)			
35	6APE他 (西前沖)		51	6AFF-D (西加座2663-1・4, 2664、轟下)			
36	56		6ABI-F (中垣内)	52	6AGF-D (西加座2703、他)		
37-1			6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	53-1	59		6ACM-P (東裏284、体育館)
37-2			6ADQ-R (牛養3021-2、野田)	53-2			6ACA-M (古里3280-2、中西)
37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、押田)	53-3	6ABE (古里573-2、永納)			
37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本経木)	53-4	6ACL-S (東裏271-1、田所)			
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53-5	6ACR (木業山97-5、田中)			
37-6		6ABD-A (古里588-2、北畠)	53-6	6AGO (鍛冶山、町道側溝)			
37-7		6AEC-M (高千2861-2、齋王公民館)	53-7	6ADD-U (篠林3147-3、野呂)			
37-8		6ADR-P (木業山128-8・13・14、富山)	53-8	6AGE-O (東前沖2470-2、上田)			
37-9		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-9	6ACS-O (木業山95-2、浅尾)			
37-10		6AED-O (東殿3217-1、渡部)	53-10	6ACA-R (古里3267-1、西川)			
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)	53-11	6ADR-W (木業山131-7、西村)			

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区	
53-12	59	6 A B L - K (中垣内464-2, 沢)	70-10	62	6 A F D - B · D (西南沖2649-4, 大西)	
53-13		6 A D Q - L (牛養3022, 辻)	70-11		6 A G O - H (殿治山2363-2, 川合)	
53-14		6 A C M - O (東裏287-3, 体育庫)	70-12		6 A D D - F · G (篠林3158, 長谷川)	
53-15		6 A F K - C · D (西加座2721-1, 鈴木)	70-13		6 A E C - N · G (高千, 佐藤)	
54		6 A F E - N (西南沖2630, 他)	70-14		6 A B L - R (中垣内459, 北岡)	
55		6 A E N - P (御原, 御館2785-1, 他)	70-15		6 A F D - A (西南沖2644-1, 山本)	
56		6 A C H - S (東裏289-1, 他)	70-16		6 A C B - A 他 (町道塚山線拉幅)	
57		6 A G F - H · I (東加座2441, 他)	71		6 A B E (古里501, 他)	
58-1	60	6 A F K - C · D (西加座2721-1, 鈴木)	72-1	6 A B E (古里500, 他)		
58-2		6 A F H - N (西加座2681-8, 三村)	72-2	6 A B F (古里523, 他)		
58-3		6 A C M - N (東裏3385-2, 斎宮小)	72-3	6 A B F (古里551-2, 他)		
58-4		6 A B L - A (中垣内4731-1, 小家)	72-4	6 A B F (古里528-1, 他)		
58-5		6 A D Q - Q (牛養, 町道側溝)	73	6 A F F - B · C · E · G (西加座2663-5, 他)		
58-6		6 A D R - V (木葉山131-3, 西山)	74-1	6 A B F (古里523, 他)		
58-7		6 A G S - G (中西611, 山路)	74-2	6 A B F (古里522, 他)		
58-8		6 A B M - A (中垣内430-3 他, 近鉄)	74-3	6 A B E · F (古里524, 他)		
59		6 A C J - I (広瀬3379-1, 他)	74-4	6 A B E (古里548-1, 他)		
60		6 A G J - B · D · G (東加座2450-1, 他)	74-5	6 A B E (古里543, 他)		
61		6 A F F - H · I · D (西加座2663-1, 他)	75	6 A G F - C (西加座2702, 他)		
62		6 A I - J · K (東加座2425, 他)	76-1	63	6 A D B - A · D (町道塚山線拉幅)	
63		6 A F G - M · N (西加座2659-1, 他)	76-2		6 A D E - F · G (篠林3158, 長谷川)	
64-1		61	6 A C O - H (牛養3395-1, トーカイ)		76-3	6 A B E (古里554, 明和町)
64-2			6 A G L - F (東加座2435-1, 大和谷)		76-4	6 A C K (東裏354-13, 山際)
64-3			6 A D D - A (篠林3136-1, 山路)		76-5	6 A E E - W (楽殿577, 岡田)
64-4	6 A G R - N (苗川2340, 丸山)		76-6		6 A C B - A (塚山3276-1, 今西)	
64-5	6 A C M - R · Q · P (東裏3385-2, 斎宮小)		76-7		6 A C M - M (広瀬3385-2, 斎宮小)	
64-6	6 A C K (東裏361-2, 竹川自治会)		76-8		6 A F M - G (殿治山2736-3, 近鉄)	
64-7	6 A G I - G (東加座2435-2, 大和谷)		76-9		6 A C Q (南裏144-1, 田所)	
64-8	6 A G R - J (苗川2341-6, 山下)		76-10		6 A B D - U (古里579, 池田建設)	
64-9	6 A D Q - M (牛養, 町道側溝)		76-11		6 A B E (古里554, 明和町)	
64-10	6 A C F - A (東裏365-1, 樋口)		76-12		6 A E E (楽殿, 町道下水管)	
64-11	6 A C M - O (東裏3385-2, 斎宮小)		76-13		6 A D D - K (篠林3143, 中西)	
64-12	6 A D E - B (篠林3162-3, 江崎)		76-14		6 A E E - S (楽殿2878-3, 山路)	
65-1	6 A C C - M (塚山3331-1)		76-15		6 A B F - 6 A B H (中垣内, 県道拉幅)	
65-2	6 A E G - S (楽殿2908-2, 他)		76-16		6 A E K - B (下置2936-2, 明和町)	
65-3	6 A E I - L · M (楽殿2917-4, 他)		76-17	6 A E V - A (鈴池339-5, 水島)		
66	6 A G G - C (東加座2437-1, 他)		77	6 A G J - D (東加座2453, 他)		
67	6 A B F (古里523, 他)	78	6 A D L (宮ノ前3054, 他)			
68	6 A B F (古里502, 他)	79	6 A G G - A · B (東加座2440, 他)			
69	6 A G M - E - H (東加座2373, 他)	80	6 A F G - F - I (西加座2696, 他)			
70-1	62	6 A C C - X (塚山3325-1, 江崎)	81-1	H1	6 A E C - F (町道塚山線拉幅)	
70-2		6 A E E - W (楽殿2875-2, 岡田)	81-2		6 A B J, 6 A B K (古里, 県道拉幅)	
70-3		6 A D R - I (牛養山129-5, 大西)	81-3		6 A D S - M (木葉山137, 中田)	
70-4		6 A C N - A · B · E · L (広瀬3389-8, 林)	81-4		6 A E D - L (楽殿2881-2, 山本)	
70-5		6 A E W - A (鈴池333-1, 八田)	81-5		6 A F Q - C (中西597-2, 木戸口)	
70-6		6 A B L - S (中垣内430-6, 奥山)	81-6		6 A D D - F (篠林313, 池田)	
70-7		6 A E E - T (楽殿577, 浅尾)	81-7		6 A B L - U (中垣内430-7, 川本)	
70-8		6 A E U · 6 A E X - A (牛養, 鈴池, 三重県)	81-8		6 A B J (古里, 明和町)	
70-9		6 A E P - C · D (御館, 御原, 近鉄)	81-9		6 A C F (中垣内, 三重県)	

次	年	度 調 査 地 区	次	年	度 調 査 地 区
81-10	1	6 A D R - V (木瀬山297、明和町)	85-1	2	6 A B D ~ 6 A C D (古里、三重県)
81-11		6 A C M - N (広瀬3385-2、明和町)	85-2		6 A C A - P (古里3279、松本)
81-12		6 A E D - A (篠林3225、中川)	85-3		6 A C J - B · D (東裏、明和町)
81-13		6 A C B (塚山3276-19他、明和町)	85-4		6 A B E (竹川573-1、永納)
81-14		6 A E D - F (南殿2844-2、澄野)	85-5		6 A E D - U (南殿2885-2、西山)
81-15		6 A E D - U (南殿2885-2、西山)	85-6		6 A F H - B (西加藤、明和町)
81-16		6 A G (北野3655-1、他)	85-7		6 A C B - C (塚山3276-3他、加藤)
82-1		6 A D I - F ~ J (上園3095、他)	85-8		6 A B I - N (中垣内427-1、小林)
82-2		6 A D I - K · L (上園3100、他)	86		6 A F H - F · G · H (西加藤2679-1他)
83		6 A F J - C ~ F (西加藤2770-3、他)	87		6 A C E - N · Q · R (塚山3356他)
84-1		6 A F J - G (西加藤2764-3)	88		6 A G N - C · D (殿治山2411-1他)
84-2		6 A F H - G · H (西加藤2679-1、他)			



第32图 查宫跡地区表示

圖

版



第86次調査全景（北から）



第88次調査全景（南から）



全 景 (北から)



北 半 景 (南から)



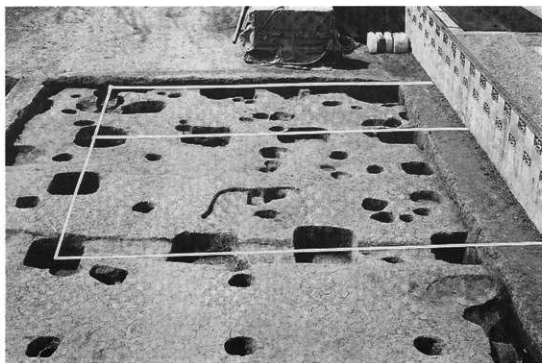
S F 6009 (南西から)



S B 6000 (北から)



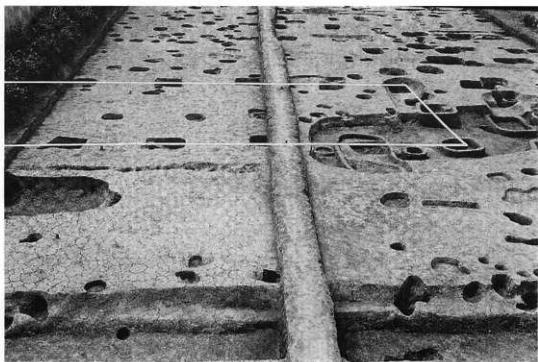
S B 6020 (北から)



S B 6055 (北から)



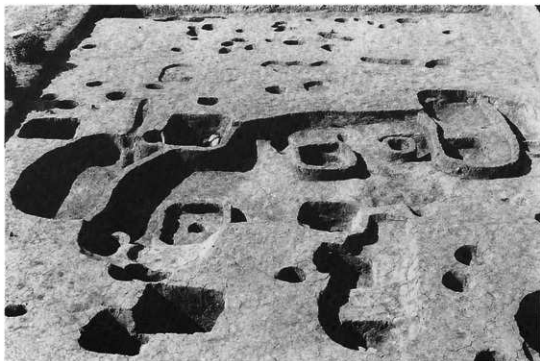
S B 5924・S K 6046・S K 6048 (北から)



S B 6010・S B 6050 (北から)



S K 6030 (北西から)



S K 6011～S K 6015 (南から)



S K 6060他土坑群 (北西から)



S K 6005 (南西から)



全 景 (北東から)



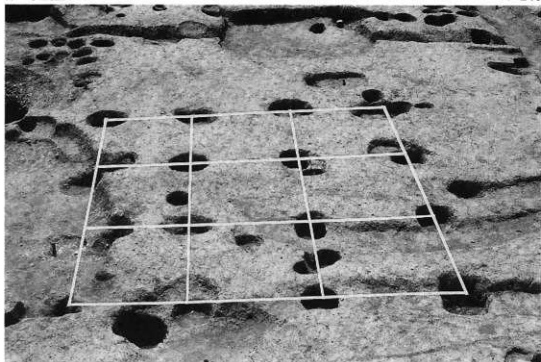
南調査区全景 (西から)



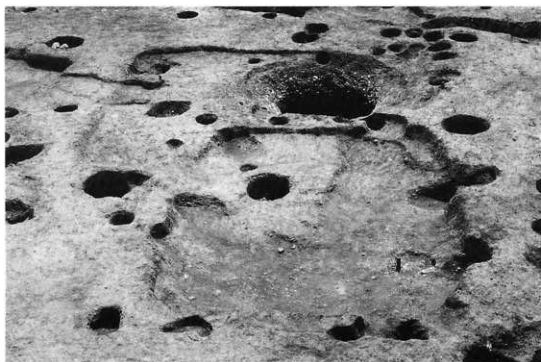
S B 6090 (西から)



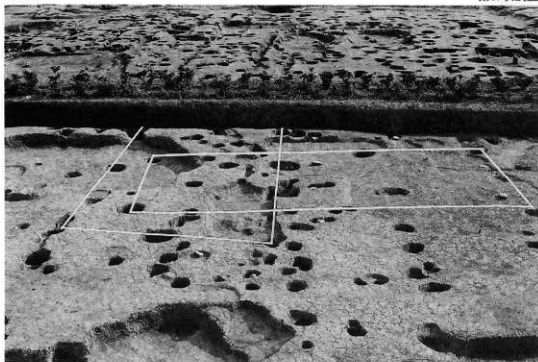
S B 6090・S B 6091・S B 6098～S B 6100 (南から)



S B 6092 (北から)



S B 6098 ・ S B 6099 (北から)



S B 6123・S B 6124・S K 6128 (北から)



S B 6135・S B 6105・S B 161 (北から)



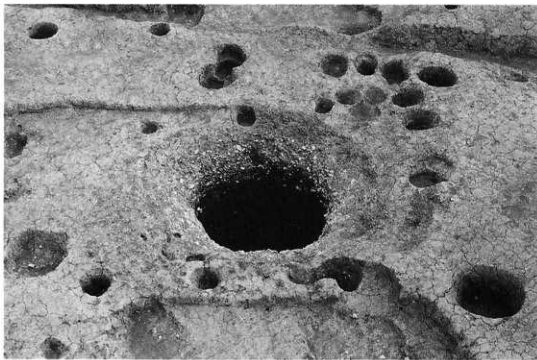
S B6165 (北から)



S B6180 (北から)



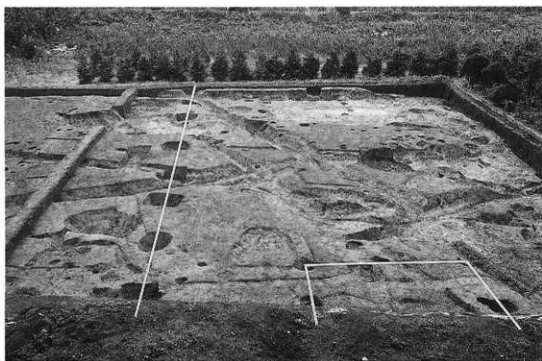
S D 207 (南から)



S E 6101 (北から)



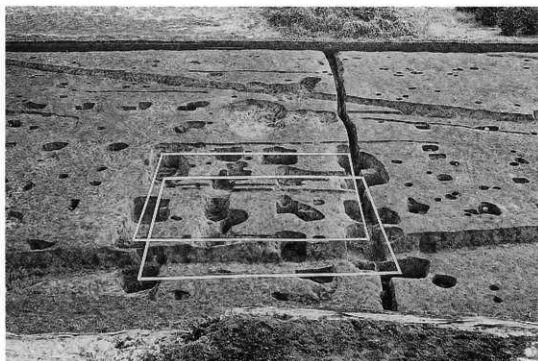
全 景 (東から)



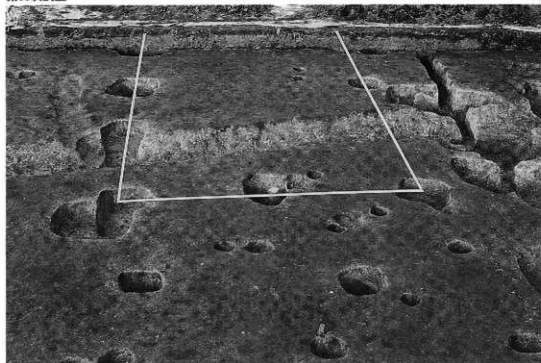
西半景・SA2800 (北から)



S D2404 (東から)



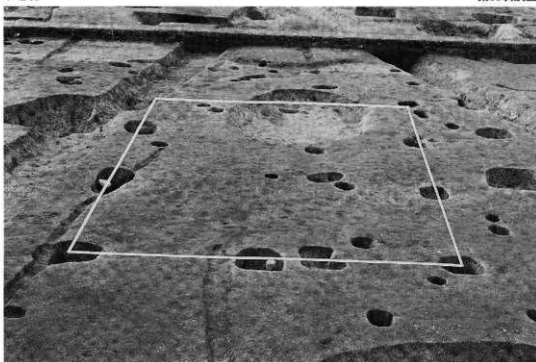
S B6237・S B6238 (北から)



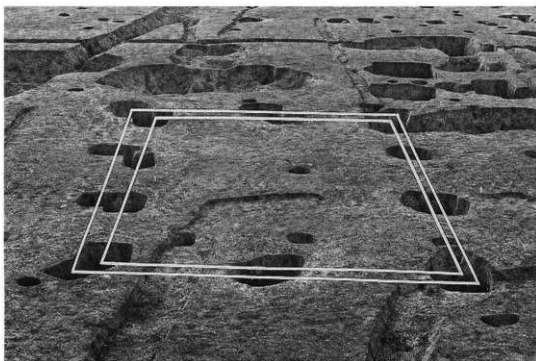
S B 6233 (南から)



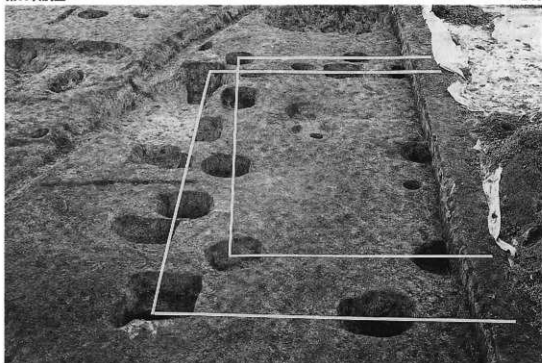
S B 6232 (南から)



S B6234 (東から)



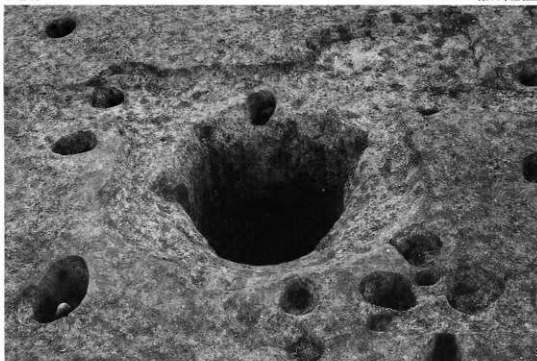
S B6241・S B6242 (東から)



S B 2390・S B 2391 (東から)



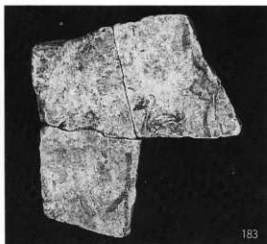
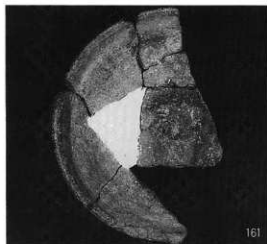
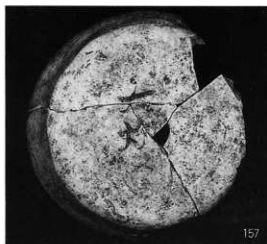
S B 6251・S K 2397・S K 2402 (北から)



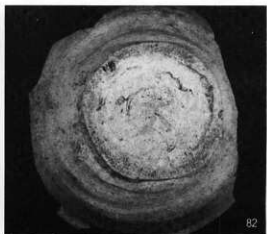
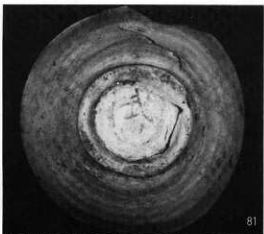
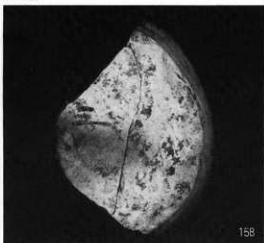
S E 6240 (東から)



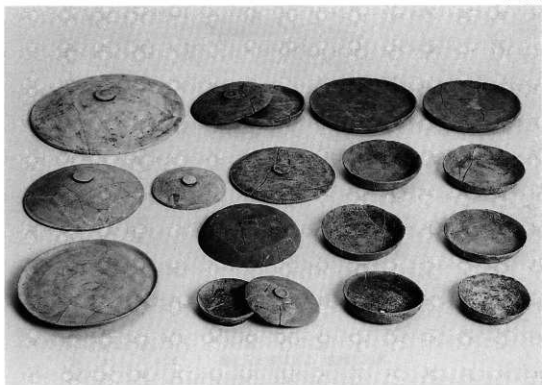
S K 6226・S K 6227土層断面 (東から)



第86次調査出土墨書土器（大炊・官・府・水鳥の絵・本あるいは奉・豊兆カ）



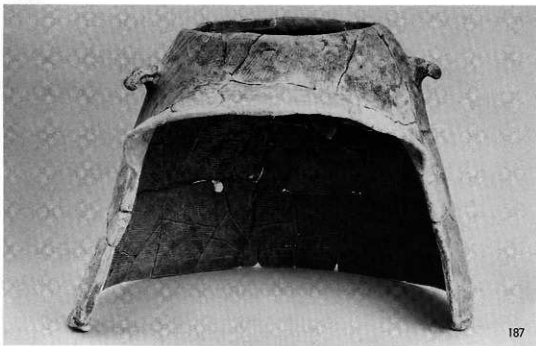
上段：第86次調査出土墨書土器（三・周）、中段：第87次調査出土石硯、陶硯、須恵器（1：3）
 下段：第87次調査出土墨書土器（武・大）



第88次調査 S K 6225出土土器

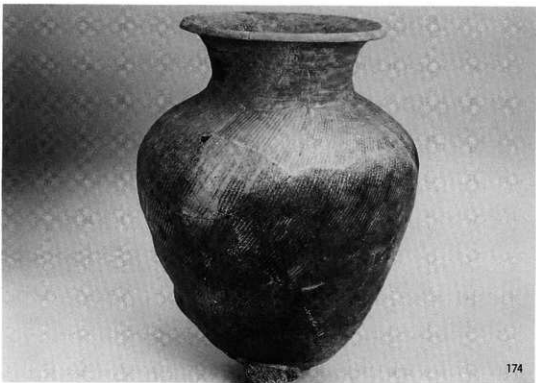


第88次調査 S K 6210出土土器



187

第88次調査 S K 2798出土土器 (1 : 5)



174

第88次調査 S K 6215出土土器 (1 : 5)

国史跡 齋宮跡

発掘調査概報

平成 3 年 3 月 30 日

編集発行 齋宮歴史博物館

印刷 光出版株式会社

本書は、齋宮歴史博物館の許可を得て、
齋宮研究会が増刷したものである。

